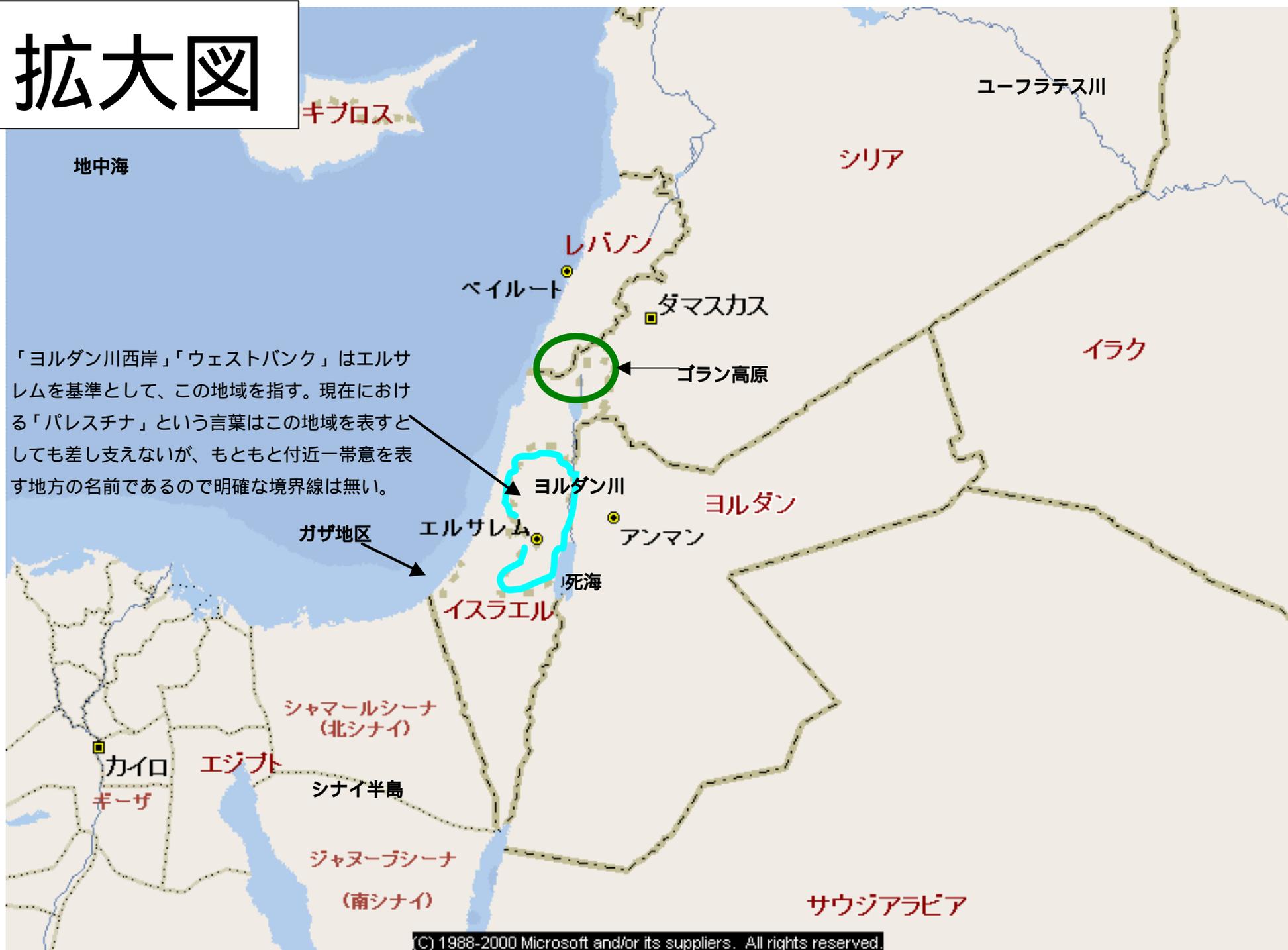


# 周辺図



# 拡大図



この文章は僕が2000年夏に中近東地域を旅行した際に収集した知識を整理するため、当時の情報をもとに2000年9月に執筆されたものである。現在同地域が抱える諸問題のそもそもの発端は何なのだろうかという疑問が出発点となっているため、比較的最近の事項に関してはあまり触れてはいない。知っての通りこの地域の情勢の変化はめまぐるしく、それらを逐一整理しつつ加筆してゆくということが一個人の力では不可能に近いので、怠惰も手伝って執筆後新たに起きた出来事についての加筆も行っていない。

が、当初の目的である中東問題の原因探求ということは十分に達成され、満足のゆく結果を得ることが出来たと僕としては思っている。色々な知識を与えて下さった皆様方に感謝したい。

# 目次

第 1 章	前提となる知識	1
1.1	「エルサレム」とは	1
1.2	「パレスチナ」とは	1
1.3	地理的特徴	2
1.4	今現在における、国としての一般的な特徴	2
1.5	民族	3
1.6	宗教	3
第 2 章	紀元前の歴史（～1 世紀）	6
2.1	大シリアにおける最初の民族	6
2.2	アラム人の出現	6
2.3	パレスチナ地方	7
2.4	アッシリア、バビロニア、ペルシャ等について	7
第 3 章	中世に至るまでの歴史（1～12 世紀）	9
3.1	ビザンティン帝国時代	9
3.2	イスラム教の登場	9
3.3	シリアの黄金時代	10
3.4	アッバース朝の台頭と滅亡	10
3.5	十字軍の登場	10
第 4 章	近代に至るまでの歴史（12 世紀～20 世紀初期）	11
4.1	モンゴル人の侵入	11
4.2	オスマントルコ	11
第 5 章	第一次世界大戦（1914～1920 年）前後	12
5.1	シオニズム運動の登場	12
5.2	第一次世界大戦の勃発	13
5.3	各国の戦後	14
第 6 章	第二次世界大戦（1939～1945 年）前後	16
6.1	ヒトラー及びナチスドイツの台頭	16
6.2	ホロコースト	16

6.3	戦争の終わり	17
6.4	戦後のユダヤ人	17
6.5	戦後のアラブ人	17
第7章	第一次中東戦争（パレスチナ戦争、'48～'49）前後	18
7.1	第二次世界大戦の終了からイスラエルの独立まで	18
7.2	戦争の勃発	18
7.3	戦争後の領土	19
7.4	難民問題の発生	19
第8章	第二次中東戦争（スエズ動乱、'56～'57）前後	21
8.1	ナセル大統領の登場と戦争の勃発	21
8.2	各国の動き	21
8.3	パレスチナ解放機構（PLO）の誕生	22
第9章	第三次中東戦争（6日間戦争、'67）前後	23
9.1	その背景	23
9.2	戦況	23
9.3	領土の拡大とエルサレム奪回	24
9.4	国連の動き	24
9.5	安保理決議二四二の内容	25
第10章	第四次中東戦争 （贖罪日戦争・断食月戦争、'73年）前後	26
10.1	エジプトの奇襲	26
10.2	石油戦略	26
10.3	安保理決議三三八	27
10.4	ヨルダンの動向（黒い9月事件）	27
第11章	和平の第一歩（エジプトとイスラエル）	29
11.1	サダト大統領のイスラエル訪問	29
11.2	キャンプ・デービッド合意	29
11.3	平和条約の調印とエジプトの受難	30
第12章	レバノンにおける情勢（レバノン戦争など）	31
12.1	黒い9月事件以降のPLOと内戦の勃発	31
12.2	レバノン戦争の勃発	31
12.3	和平への試み	32
12.4	大虐殺	32
12.5	現在に至るまで	32
第13章	パレスチナ人をめぐる状況	34

13.1	蜂起の背景	34
13.2	インティファダの大流行と PLO	34
13.3	パレスチナのイスラエル人	35
第 14 章	周辺諸国の動きのまとめ	36
14.1	2 つの戦争	36
14.2	ヨルダン	36
14.3	シリア	37
第 15 章	ユダヤ人とアラブ人	38
15.1	ユダヤ人の気持ち	38
15.2	PLO の動向	39
15.3	現在に至るまで	39

## 第 1 章

# 前提となる知識

### 1.1 「エルサレム」とは

聖地エルサレムはそもそもどこにあるのかというと、中近東地方、現在のイスラエルとヨルダンの国境ともなっているヨルダン川の流れ着くかの有名な「死海」から西北に 20km 程度のところにある。このあたりは丘や山が多く、キリストが昇天したといわれるオリブ山、シオニズムの語源となったシオン山などもエルサレム市内にあり、街自体にもきつい坂が目立つ。

エルサレムはユダヤ教、キリスト教、イスラム教の 3 つの宗教にとって聖地とされている。エルサレムには過去ユダヤ教の絶対の神ヤーヴェを祀った神殿<sup>\*1</sup>があり、キリストが処刑され、後に復活し、昇天したのもエルサレムである。また、イスラム教の祖ムハンマドが天使を従え天馬にのって昇天したのもここエルサレムといわれ、メッカ、メディナについて第 3 の聖地とされる。ユダヤ教とイスラム教は最後の審判の際全ての魂がエルサレムに集結するとしているし、ユダヤ教などはそれに加えて死者も生き返るとしている。そのため、ユダヤ人の墓地は聖地「嘆きの壁」にほど近いところに集まっていて、かの「オスカー・シンドラ」の墓もそこにある。

「都市」としては、おおざっぱに新市街と旧市街に分けられる。新市街とはその名の通り比較的新しい街であり、近代的なビルや整備された公園などが目立ち、主にユダヤ教徒が住んでいる。旧市街とは主に全長約 4km の城壁に囲まれた部分をいい、街全体が遺跡といえるほど、何かのゆかりの場所が多い。嘆きの壁やキリストの処刑地である聖墳墓教会なども、もちろんここにある。旧市街内部は比較的ユダヤ教徒が多いユダヤ人地区、イスラム教徒が多いムスリム地区などと色々な地区があるが、別に明確な境界線があるわけではない。なお旧市街内部はムスリムが多数派であり、土産物屋や野菜市などは他のアラブ諸国と何ら変わりはない。そういうところは、もちろんアラビア語が標準に使われていて、ヘブライ語を話すと露骨に不快がったりされる。

### 1.2 「パレスチナ」とは

世にいう「パレスチナ」とは、エルサレムを含むある地域のことをいう。明確な境界線なども存在しない。時代や民族、宗教によって色々と呼び方や大きさが代わるためややこしい。ここにほぼ同じ地域を表す言葉を列挙しておく。あくまでこれらは同じ様な地域をあらわす「土地」なだけであり、宗教的な意味合い等は微妙に異なる。

- パレスチナ、パレスチナの地、パレスチナ地方
- 約束の地（ユダヤ人が神から与えられたことから）

<sup>\*1</sup> 神殿はローマによって破壊されたが、神殿の西側の壁だけは破壊されずに今も残る。この壁こそが「嘆きの壁」である

- カナンの地、カナーンの地（カナン人がいたことから）
- ウェストバンク、ヨルダン川西岸（第二次世界大戦後の中東問題はヨルダン川以西の地域がメインであり、そこをこうあらず。本当はだめなのかもしれないが、簡単のためここでは西エルサレムを含もうと含むまいとヨルダン川以西のパレスチナ地方は「ウェストバンク」と書くことにする。）

## 1.3 地理的特徴

中東というとどうも砂漠というイメージが先行してしまいがちだが、東にユーフラテス川、西に地中海を臨むこの地域は古代より土壌が豊かで、「肥沃な三日月地帯」と呼ばれる地域などもあり、特にエルサレムを含むパレスチナ地方は「乳と蜜の流れる地」等と呼ばれ、特に沃野に恵まれていた。ユーフラテス川、ヨルダン川流域では現在も農業が盛んで辺り一面に草原が広がっているし、沿岸地方は地中海性気候特有の温暖な気候を持つ。過去二千年以上にわたりこの地でいざこざが絶えなかったのもこの豊かな土地柄によるところが大きい。

もちろん不毛な土地も内陸部を中心に広範囲にわたって存在し、ヨルダン及びシリアの東部は延々と砂漠が続く。が、さらさらした砂と丘からなる一般的な「砂漠」は少なく、その多くはごつごつした石や岩が多く地面に露出している。これは「土漠」と言われたりもする。

全体として雨はほとんど夏には降らず、ヨルダンの首都アンマンにある高級住宅街ですら夏には水道水がでなかったりする。そしてイメージに反し冬は日本並に気温が下がり雪が降ることも決して珍しくはない。レバノン山脈には万年雪も見られ、冬はスキーリゾートとしての賑わいを見せる。

## 1.4 今現在における、国としての一般的な特徴

### 1.4.1 ヨルダン

正式名称は「ヨルダン・ハシミテ王国<sup>\*2</sup>」といい、国王アブドゥッラーを頂点におく立憲君主制をとる。宗教はほぼイスラム教で公用語はアラビア語、首都はアンマン。人種はほとんどアラブ人だが7割近くの人口はパレスチナ難民であり、ヨルダンの抱える大きな問題となっている。イラク、サウジアラビア、シリア、イスラエルと接している。

### 1.4.2 シリア

正式名称は「シリア・アラブ共和国<sup>\*3</sup>」といい、アサド大統領擁する共和制をとる。宗教、公用語、人種はヨルダンとほぼ同じで、首都はダマスカス。トルコ、イラク、レバノン、ヨルダン、イスラエルと接しているがイスラエルとの国境近辺はかのゴラン高原にあたり、現在国連の監視下に置かれているため通行は不可能。現在イスラエルとは国交がないばかりかイスラエル入国経験のある者は入国が拒否されてしまう<sup>\*4</sup>。

---

<sup>\*2</sup> Hashimite Kingdom of Jordan

<sup>\*3</sup> Syrian Arab Republic

<sup>\*4</sup> シリアのビザの申請書には”Have you visited occupied palestine?”という項目がある。「イスラエル」でなく「占領されたパレスチナ」という表現を使っている

### 1.4.3 レバノン

正式名称は「レバノン共和国<sup>\*5</sup>」といい、共和制・大統領制をとる。人種はほとんどがアラブ人だがその宗教はイスラム教はもちろんのことだがキリスト教も多く見られる。公用語はアラビア語に加えてフランス語もあるなどほかの中東諸国とは違う面も多い。首都はベイルート。国土は非常に豊かで各地に森が見られ、「中東のスイス」などと呼ばれるらしい。ここには防腐生に優れた「レバノン杉」と呼ばれる木が数多くあり、それを利用して海上交易を行って栄えたという歴史がある。今は一部地域に数千本を残すのみだがこの木はレバノン人の誇りでもあり、レバノン国旗にもなっている。

また、この国もシリア同様イスラエル入国経験のある者の入国は許可されていない。

### 1.4.4 イスラエル

正式名称は「イスラエル国<sup>\*6</sup>」で、議会制民主主義。宗教はユダヤ教が主流。人口や面積などはイスラエルが主張するものと諸外国が認めているもので大きな開きがある（ガザ地区、ウェストバンク、ゴラン高原など）。人種はユダヤ人、アラビア人が殆どで、公用語はアラビア語とヘブライ語であるが、アラブ人（パレスチナ人）の多い地域ではアラビア語が使われ、ユダヤ人の多い地域ではヘブライ語が主に使われている。エルサレムがイスラエルの永久の首都であるとイスラエルは主張しているが、国連はエルサレムは国際管理下に置くべきとの決議を出し、多くの諸外国もエルサレムは首都と認めてはいない<sup>\*7</sup>。ユダヤ人が主に住んでいる各都市は他の中東諸国に比べて格段に発達しており近代的な町並みが続く（テルアビブなど）。逆にパレスチナ人が主に住んでいる地域ではほかのアラブ諸国と何ら変わりのない景色である（エルサレム旧市街など）。通貨はシェケルといい、ユダヤ人及びパレスチナ人のどちらの地域でも用いられている。

## 1.5 民族

ここで挙げた国には先史の時代からセム系民族と呼ばれる人々が住んでいた。一説にはセムとは「ノアの箱船」のノアの長男セムのことで、セム系民族とは彼の子孫であるといわれている。現在のヘブライ語及びアラビア語は彼らの用いた言語に端を発する（実際基本的な単語など驚くほどよく似ているし、右から左に書いていくという点も同じである）。ノアから10代目にあたるアブラハムが父祖と、ユダヤ人もアラブ人も考えている。ちなみにアラブ人とはユダヤ人以外のセム系民族を指し、彼らはユダヤ人の離散の後長年、広範囲にわたり中東に住んできた。「パレスチナ人」とは、パレスチナという土地に住んでいたアラブ人のことを言う。人種的には紛れもないアラブ人である。

## 1.6 宗教

### 1.6.1 ユダヤ教

紀元前17世紀前後にパレスチナ地方は大飢饉におそわれたため、この地方の民族はエジプトへと移住する。が、エジプトの圧政のもと彼らは奴隷の扱いを受けることになる。苦しい生活が続く中紀元前13世紀頃にあらわれたモー

<sup>\*5</sup> Republic of Lebanon

<sup>\*6</sup> The State of Israel

<sup>\*7</sup> 諸外国の大使館はテルアビブに設置されているが、これは大使館をエルサレムに置くことによりエルサレムを首都と認めたと誤解されるのを防ぐためである。

ゼが子孫 7000 人ほどを引き連れエジプトを脱出する。パレスチナ地方への帰国の途中モーゼはシナイ半島にあるシナイ山で神から十戒<sup>\*8</sup>を授かる。この神との約束（旧約）である十戒こそがユダヤ教の母胎であり、このときモーゼの率いていた民族がユダヤ民族（ヘブライ人）である。

ユダヤ教の主な特徴としては

- ヤーヴェを唯一絶対の神とする
- 選民思想（自分たちは神から選ばれた民であるという考え）
- 契約思想（十戒を忠実に守りさえすれば恩恵が受けられるという考え）

などがある。因みに、ユダヤ教の会堂をシナゴグ、ユダヤ教の指導者をラビといい、その聖典はヘブライ語でかかれている旧約聖書である。

実際に教団が設立されたのは紀元前 6 世紀頃の話である。新バビロニア王国から解放された（後述）ユダヤ人がエルサレムにヤーヴェの神殿を再建したことによってユダヤ教団が成立した。現在も残る「嘆きの壁」がこの神殿の一部であることは既に述べた。現在もユダヤ民族の再興を願ってやまない敬虔なユダヤ教徒が祈りを捧げにくる場所である。

## 1.6.2 キリスト教

ユダヤ民族のパレスチナへの帰国は決して楽な道のりではなく、厳しい自然のもと指導者モーゼを含む何人もの仲間が故郷を見ることなく志半ばに倒れた。さらに、ようやくたどり着いた故郷、パレスチナ地方には既に別の民族が定住しており彼らとの抗争も絶えなかった。のちにユダヤ民族の王国を作ることに成功するものの、外部勢力に滅ぼされては厳しい迫害を受けたり別な国につれてゆかれたりした。

このような苦難の道のりを歩んできたユダヤ民族には世に言う「最後の審判」「終末観」の考えがある。人が支配する悪の世はいつか終わりを告げ、神による審判が行われて、その時ヤーヴェを信仰し律法を守るもののみ最後の栄光が与えられる、というものである。この時に神の使いである「人の子のような者」が天の雲に乗り降りるといわれていたが、これがメシア（救世主）のことである。異教徒や異民族から迫害を受け続けているユダヤ民族は、メシアがいつの日にか自分たちを彼らから救い出してくれると信じていた。「キリスト」とは、ギリシャ語で表現されたメシアのことである。

そんな中、かのイエスがベツレヘム市に生まれる。当時この地方はローマの支配下にあり、民衆の心はまさに絶望の中にあった。イエスは 30 歳の頃から伝導活動を開始。その内容は、神の愛は人種や階級に関係ない、というもので従来のユダヤ教の選民主義、律法主義を超越し万民に受け入れられるものであった。イエスが最後の審判が近いということを感じていたこともあり、彼こそがメシアであると信じる人々が続出し、次第に勢力を伸ばしていった。が、民衆の力を恐れた当時の指導者及びラビはイエスを処刑することを決定。イエスはエルサレムで十字架の刑に処されることになる。

のち、イエスの弟子たちなど、彼こそ人類の救世主であると信じる人々がエルサレムに教団を設立、教会の建立を始めるが、これがキリスト教（カトリック）のおこりであり、世界への伝導活動はここから始まる<sup>\*9</sup>。神の前では誰でも平等という考えは異邦人にも受け入れやすく、またたく間にヨーロッパに広がってゆくわけである<sup>\*10</sup>。

<sup>\*8</sup> (1) お前には私以外に神があつてはならぬ。(2) お前は偶像を彫つてはならぬ、拜んでもならぬ。(3) お前の神ヤーヴェの名をみだりに唱えてはならぬ。(4) 安息日を忘れず、聖く保て。(5) 父母を敬え。(6) 殺すなかれ。(7) 姦淫するなかれ。(8) 盗むなかれ。(9) 隣人に対して偽証するなかれ。(10) 隣人のものを欲しがらなれ。

<sup>\*9</sup> このころから「新約聖書」が編纂され始めた。旧約聖書とともにキリスト教の教典である

<sup>\*10</sup> 4 世紀の頃にはローマの国教にまでなっている

### 1.6.3 イスラム教

ムハンマド（マホメット）を祖とする宗教。彼は6世紀頃にメッカ（現在のサウジアラビアにある）で生まれる。それまでしばしばメッカ郊外の山で瞑想していた彼はある日神の啓示を神の使徒から授かる。その時の神がイスラム教の唯一絶対の神アッラーであり、その時からムハンマドは神の言葉を授かった預言者となった。ムハンマドは少年時代からシリア地方などに隊商旅行に出かけていたこともあり、ユダヤ教及びキリスト教に関する知識を持っていたためか、初期の啓示は「アッラーは唯一絶対の神で、その教えに服従して善い行いをしたものが最後の審判で天国にゆくことができる、さもなくば地獄に墮ちる」といったもので、非常にユダヤ教に似ている。当時メッカで行われていた偶像崇拝や、貧富の差の存在にムハンマドは強い批判の心を持っていたようなので、それらを全て否定する新しい宗教を彼は作り出した、といえる。

イスラム教の教典は「コーラン」と呼ばれ、絶対の神アッラーに帰依しその教え（コーラン）に従って生きることを信条としている<sup>\*11</sup>。そのため、預言者ムハンマドは神や神の子などではなく、あくまで神の言葉を授かった人間の子とされているし、キリスト教における神父やユダヤ教におけるラビにあたるような地位の人間もいない。また、イスラム教徒が神に祈りを捧げる場所をモスクという。

---

\*11 イスラムとは「帰依する」ことを意味している

## 第2章

# 紀元前の歴史（～1世紀）

中東の諸問題を論ずる上では欠かせない「ユダヤ教」は紀元前に生まれている。それと同様に、ユダヤ教・ユダヤ民族の背負っている悲劇、迫害の歴史も紀元前から始まり、今もなお続いている。「約束の地」に対する彼らの思いは我々の想像を超えるものがある。

なお現在のレバノン、シリア、イスラエル、ヨルダンにまたがる地域は古くから「シリア」と呼ばれてきたが、現在は「シリア・アラブ共和国」と区別するためにこの地域は「大シリア」と呼ばれる。ここでもこの表現方法に倣うことにする。

### 2.1 大シリアにおける最初の民族

この地は、世に言う「世界四大文明」のうちの二つ、エジプト文明とメソポタミア文明の中間に位置する。そのうちこの地域には、この二つの文明及びその周辺も含むオリエントと呼ばれる一大文明圏を形成するが、そこで早くから活動していたのが、先に述べたセム系民族である。セム系民族のうち、大シリアに最初に住み着いたものはアムル人、カナン人と呼ばれる。アムル人は内陸部に、カナン人は地中海沿岸地方に定住した。

紀元前 19 世紀頃、アムル人はバビロン第 1 王朝<sup>\*1</sup>（古バビロニア王国）を設立し、一方カナン人は地中海沿岸地方にベイルートやエルサレムといった都市国家を建設。この都市国家は政治的に統一されることはなかったものの個々に栄えることになる。特に地中海沿岸の都市は海上交易においてめざましく活躍し、同じ海洋民族であるギリシャ人は彼らのことをフェニキア人と呼んだ。彼らはギリシャ人が本格的に乗り出す紀元前 6 世紀ほどまで地中海の貿易を独占した。また彼らはエジプトの象形文字を簡略化したフェニキア文字というものを使っていたが、これは後にギリシャに伝わりアルファベットの起源となった。アルファベットの他にも彼らの功績としてガラスを発見（発明？）したことが挙げられる。

### 2.2 アラム人の出現

紀元前 15 世紀頃、アラビア半島からアラム人と呼ばれる民族が北上。前述のアムル人を始め、様々な民族を吸収して勢力を強めつつ、紀元前 13 世紀までにシリア各地を支配。紀元前 11 世紀末にベン・ハダド王朝をたてる。この王朝はダマスカスを中心に陸上交易を支配。ラクダを用いる隊商で各地に進出した。そのため、彼らの用いたアラム語は後にアラビア人が出現するまで西南アジアの広い地域で使われていた。イエスが使っていた言語も、このアラム語といわれている。後に彼らは、後述する新バビロニア王国をつくる。

---

<sup>\*1</sup> 「目には目を」で有名なハンムラビ法典を作り出した王朝

## 2.3 パレスチナ地方

これと同じ頃、パレスチナ地方では自らをイスラエル人と称するヘブライ人が定着していた。その一部がエジプトに渡り、戻ってきたのは「ユダヤ教」の顛末で述べられているとおりである。彼らが戻ってきた後、パレスチナに住むイスラエル人の諸部族は交流し始め、共通の神ヤーヴェを崇拜しつつ団結し、先住民のペリシテ人<sup>\*2</sup>と闘争を繰り広げる。紀元前 11 世紀ごろにイスラエル人の王国が建設され、2 代目の王ダビデ<sup>\*3</sup>のころペリシテ人を撃退し、首都をエルサレムとしてヤーヴェの神殿を建立する。この神殿の建立をきっかけに、エルサレムはユダヤ人にとっての聖地となった。3 代目の王ソロモンのころこの王国は最盛期を迎え、王宮や神殿が建てられて「ソロモンの栄華」と呼ばれるほどに栄える。が、度を越した王族の贅沢により民衆は重税や強制労働を科せられ、その不満がつもりにつもって王国は没落。後、北のイスラエル王国と南のユダ王国に分裂することになる。

北のイスラエル王国は紀元前 8 世紀にアッシリア帝国に滅ぼされ、南のユダ王国はアッシリア帝国に代わった新バビロニア王国に紀元前 6 世紀に滅ぼされる。この時の新バビロニア王のネブカドネザルはユダ王国の約 5 万人を首都バビロンに強制移住させる。これがかの有名な「バビロン捕囚」である。今日まで大勢の人間を悩ませ続けている中東にまつわる諸問題は、この捕囚に端を発すると言っても過言ではない。

捕囚とはいえ、首都バビロンにおける彼らの扱いはそんなにひどいものではなかったらしい。彼らは当時世界最大の都市バビロンにおいてかなりの自治を認められ、農業や労働に従事する。が、繁栄が続く一方バビロンの道徳は次第に退廃。そんななかでユダ王国から来た民族は団結を強め、やがて彼らは「ユダヤ人」と呼ばれることになる。

捕囚から約 40 年後、新バビロニアはアケメネス朝ペルシャの手によって滅ぼされ、ユダヤ人はペルシャの支配下のもと帰国を許される。そこでユダヤ教を成立させたことは先に述べたとおりである。しかしペルシャを滅ぼしたアレクサンダー大王（後述）はユダヤの慣習を制限し、ユダヤ教禁止令を出す。これにユダヤ人らは激しく反発し、反乱を起こして紀元前 164 年、ついに自治独立を勝ち取る。

が、約 100 年後、今度はローマの支配が訪れる。66 年にユダヤ民族は反乱を起こし、ローマ軍の撃墜をはかるが逆に 70 年にローマ皇帝に滅ぼされ、エルサレムは陥落。ユダヤ人の多くはディアスポラ（離散の民）となってしまう、世界中に散らばることとなる。残ったユダヤ民族は、パレスチナの地で少数派として宗教を拠り所に法律や文化などを継承していった。次にユダヤ人による独立国家が生まれるのは、約 1900 年後の 1948 年のことである。

## 2.4 アッシリア、バビロニア、ペルシャ等について

北イスラエル王国を滅ぼしたアッシリア帝国とは、セム系民族アッシリア人による王国のことである。彼らは鉄製の武器と騎馬隊により次々と各都市を征服し、紀元前 7 世紀には初めてオリエント地方の統一を果たした。が、武力による制服が諸民族の反感を招き 50 年あまりで滅びる。

代わって登場したのが、ユダヤ民族の捕囚を行った、かの新バビロニア王国であった。バビロニアからシリアに至る肥沃な三日月地帯を支配し、首都バビロンはこの地方の政治、経済、文化の中心となって栄えた。バベルの塔や、空中庭園が造られたのもここである。

しかし、紀元前 6 世紀頃セム系民族とは別のイラン民族であるペルシャ人がアケメネス朝のもと台頭。新バビロニア及びエジプトを滅ぼし、オリエント地方を統一。さらにダリウス 1 世の時代にはイランを中心に東はインダス川、西はエジプトやトルコに至るまでの大帝国を築き上げた。後にこれは有名なアレクサンダー大王に滅ぼされることになる。

\*2 パレスチナとはペリシテ人の地という意味

\*3 ミケランジェロ作「ダビデの像」のダビデとは、彼のことを指す

アレキサンダー大王は東はインダス川、西はギリシャに至るまでの大帝国を築き上げる。そして帝国の各地にアレキサンドリアという都市を建設し、交通網の整備、通貨の統一などを実施。結果東方とギリシャの融合した新しい文化、ヘレニズム文化が生まれることとなった。日本の飛鳥時代における芸術のなかにこれの影響を見ることができる。

大王の死後、この地方はアルケサス朝ペルシャとローマの支配に置かれることとなる。ローマの強大な軍事力のもとしばらくは平和な時代が続き、人々は次第に贅沢品を求めるようになる。これにより中国やインドなどを結ぶ交易路であるシルクロードの隊商都市が大きく栄える。現在のシリアが有する屈指の観光地「パルミラ」も、交易の重要な中継地としてこのころつくられたものである。またおなじく現在のヨルダン観光の目玉である「ペトラ」も、ナバタイ人の隊商都市としてこのころつくられた\*4。

---

\*4 阪神淡路大震災のためヨルダン旅行の日程を短縮した皇太子夫妻もここだけは訪問したらしい

## 第3章

# 中世に至るまでの歴史（1～12世紀）

ユダヤ民族が離散し、キリスト教が次第に勢力を強める中アラビア半島ではイスラム教が興る。パレスチナをめぐる戦いも次第に宗教色を帯び、遙かヨーロッパの地から神の名もとの軍隊が派兵されるまでになる。現在の大シリア及び西アジアの宗教や文化はこのころにかたちづくられている。

### 3.1 ビザンティン帝国時代

このころシリア地方はローマ帝国に支配されていたのは先にも述べたとおりであるが、じきにローマは混乱期を迎え、395年東西に分裂。東ローマ帝国と西ローマ帝国に分かれるが、このうち前者をビザンティン帝国といいシリア地方はこの帝国の支配下に入る。

一方そのころ、アレクサンダー大王の死後シリア地方以東を制覇していたアルケサス朝ペルシャはササン朝ペルシャに取って代わられる。このササン朝ペルシャとビザンティン帝国は6世紀になると激しく争いあい、多くの都市が戦火にみまわれたため、シリア地方の民衆は次第にビザンティン帝国に対し不満を募らせるようになる。

### 3.2 イスラム教の登場

このころアラビア半島にイスラム教の祖ムハンマドが生を受ける。イスラム教は宗教上のみならず政治的、社会的な改革にもつながり、ムハンマドは630年にはメッカを占領、その後10年足らずで全アラビア半島を統一した。ビザンティン帝国とササン朝ペルシャの争いによりシルクロードが次第に衰えたため、東西交易路がインド洋から紅海、エジプト、パレスチナを経て地中海にでるルートが次第に使われるようになった\*1こと等とあいまってムハンマドはシリア地方に進出。わずか4年で大シリア全土を征服したという。驚くべき速さである。

というのもムハンマド率いるアラブ人は、異教徒に課せられる税金さえ納めれば宗教には干渉しないなどと異教徒に寛大であり、かつ税金自体も旧支配国よりも随分安くしたので、ビザンティン帝国に対して不満を募らせていた大シリアの諸民族はむしろアラブ人には協力的であったらしい。さらに、イスラム教に改宗すれば税金は免除されたため、改宗するものが多かった。現在の大シリア地方にイスラム教徒が多いのはこれが原因である。

---

\*1 メッカやメディナといった都市はこのころ貿易の中継点として栄えた。この2都市は現在イスラム教の第1、第2の聖地である

### 3.3 シリアの黄金時代

長続きする抗争にビザンティン帝国とササン朝ペルシャが衰えていたこともあり、ムハンマドの死後も諸地域の征服は続いた。アラブ人はササン朝ペルシャを滅ぼし、ビザンティン帝国からはエジプトを奪った。そのころ富の分配などの問題によりアラブ人指導者は互いに対立を始めるが、シリア総督ムアウィアが対抗勢力を滅ぼし、ダマスカスを都としてウマイヤ朝を開くと征服は再開される。中央アジア、西北インド、アフリカ北部、イベリア半島にまたがるアラブ帝国を形成し、公用語もペルシャ語に代わってアラビア語となった。

そのころシリアではまだキリスト教の勢力が強かったらしいが、ウマイヤ朝は地震で壊れた教会を再建するなどしてシリア人の心をうまくつかむことにより、シリアにおける権力を確かなものとしたようだ。

### 3.4 アッバース朝の台頭と滅亡

ウマイヤ朝はアラビア人中心の政権をしき、改宗者を差別したこともあり次第に民衆の反感を招く。特にササン朝以来のイラン人においてその傾向が強く、これに乗じてムハンマドの叔父アッバースの子孫らが750年にウマイヤ朝を滅ぼし、バグダッドを都としてアッバース朝を開く\*2。イスラム独自の文化はこのころ開花し、天文学や美術、文学等が発達。かの「千夜一夜物語」もこのころできあがった。

繁栄を極めたアッバース朝も9世紀半ばになり、勢いが衰える。その後諸王国の興亡が繰り返され、シリアは混乱期にはいることとなる。

### 3.5 十字軍の登場

元来キリスト教において聖地エルサレムへの巡礼は最大の徳とされるため、巡礼者は後を絶たなかった。が、ヨーロッパからエルサレムに至る道には10世紀後半より勢力を伸ばし始めたトルコ系セルジューク・トルコ\*3がいたため、キリスト教徒は彼らトルコ人によってしきりに迫害された。そんななかヨーロッパにおいては聖地エルサレムを異教徒から取り戻そうとする運動が起きる。これが十字軍運動であり、そのために編成された軍隊が十字軍である。運動自体は1095年から約200年にわたって続いたが、エルサレム奪回自体は1099年に完了している。十字軍は聖地奪回後も進軍を続け、北シリアから紅海沿岸に至るまでの十字軍国家を建設した。今も残る十字軍の建てた教会や堅固な城は多い。

なおこの時、理不尽極まりない「魔女狩り」が行われていたのは有名な話だが、それと同時に士気高揚もねらって多数のユダヤ人が十字軍によって血祭りに上げられている\*4。ユダヤ人の迫害及び虐殺は、なにもナチスドイツに限りはしない。

さてこの十字軍の侵略に対して反撃にでたのがファーティマ朝の宰相を務めていたサラディーンである。彼は十字軍の襲撃からダマスカスを守りつつ、1187年にエルサレムを奪回。アイユーブ朝の君主となった。1192年には十字軍との間に和平条約が結ばれ、キリスト教徒の聖地巡礼が保証されている。このころ大シリアはウマイヤ朝以来の繁栄を取り戻し、イスラム世界の文化の中心地となった。

\*2 ウマイヤ朝の残党はイベリア半島に移り後ウマイヤ朝（イスラム帝国）を開いた。

\*3 シリア地方も当時セルジューク・トルコによって支配されていた

\*4 これをきっかけにヨーロッパにおける反ユダヤの感情が強まり、差別バジの着用やユダヤ人居住区などへの隔離などが行われた。大勢のユダヤ教徒は迫害を逃れるため、ヨーロッパからさらに世界中各地に流れていった

## 第4章

# 近代に至るまでの歴史（12世紀～20世紀初期）

中世から大シリアは各地の王朝に支配され、その闘争や疫病の流行などにより経済力も衰退。アメリカ大陸の発見や喜望峰周りのインド航路の発見などで貿易の中継地適な地位も失い、暗黒の時代へと沈み込む。暗黒の時代はその終わりも告げず、やがてくる第一次世界大戦に巻き込まれることとなる。

### 4.1 モンゴル人の侵入

13世紀の中頃アイユーブ朝に代わり、カイロを首都とするマムルーク朝がシリアを支配する。一方そのころチンギスハンの孫フラグ率いるモンゴル人がイラクに入りバグダッドを攻略。イランを中心としたイル・ハン王国を建て、大シリアに何度も激しい攻撃を行った。ダマスカスまでは侵略されるも、パレスチナの地はマムルーク朝が守り抜く。

が、約1世紀後にトルコ系モンゴル人ティムール率いるティムール王国が勢力を伸ばす。イル・ハン王国を倒し、シリアに侵入。またしてもマムルーク王朝はモンゴル人の脅威にさらされることとなる。疲弊したマムルーク王朝は、1516年、シリアをついにオスマン帝国に奪われてしまう。

### 4.2 オスマントルコ

オスマントルコは、モンゴル人を避けて現在のトルコに移住した民族で、14世紀頃から次第に勢力を伸ばす。1453年、コンスタンティノープル（現イスタンブール）を占領し、ビザンティン帝国を滅ぼす。後にシリアを奪い、アジア、アフリカ、ヨーロッパにまたがる大帝国を築いた。が、最盛期を築いたスレイマン1世の死後、政治は腐敗しインフレなども起こる。貴重な財源であるエジプトにはマムルーク朝の残党が根強く残っていて財産の確保もうまくいかない中、エジプトでシリアの地を要求する反乱が起き（シリア戦争）国力はますます衰える<sup>\*1</sup>。そのうちイギリスやフランスなど列強の干渉を強く受けるようになり、中世から近代にかけて約600年続いた帝国は第一次世界大戦後の1922年に滅亡する。

---

<sup>\*1</sup> トルコの弱体化により、その領土内の利権問題が発生。「聖地エルサレムの管理権問題」もこのとき姿を現した。フランスはローマ・カトリックが、ロシアはロシア正教が管理するべきと主張した

## 第5章

# 第一次世界大戦（1914～1920年）前後

19世紀中頃からヨーロッパ列強は帝国主義の色を濃くしてゆく。アジア・アフリカ諸国が次々と植民地になるなか第一次世界大戦が勃発。今現在の「イスラエル国」の抱える問題の原因が明確な形を持ってあらわれてきたのもこのころである。

### 5.1 シオニズム運動の登場

#### 5.1.1 ドレフュス事件

1894年、フランスのユダヤ人将校ドレフュスが軍事機密をドイツに売ったとして軍法会議にかけられ、容疑否認のまま流刑に処せられた。その後真犯人が判明したにもかかわらず軍部は再審を拒否したが、これが国内で大問題を起こし、結局ドレフュスは無罪となった。この一連の出来事をドレフュス事件といい、ユダヤ人差別の典型的な例である（軍部の行動は「ユダヤ人だから」という理由だけではないかもしれないが、各地で迫害を受けていたユダヤ人の心を刺激するには十分な事件であった）。シオニズム運動は、このドレフュス事件をきっかけにはじまる。

#### 5.1.2 シオニズム運動

テオドール・ヘルツル<sup>\*1</sup>は新聞記者としてこの事件を目撃。こうしたユダヤ民族問題はユダヤ人独立国家の創設によってのみ解決されると彼は考え、1896年には彼の意見を集約した「ユダヤ人国家」を発表した。シオニズムとは、彼の言う「ユダヤ人独立国家の創設」であり、エルサレム旧市街の南側にあるシオン山が語源となっている。

こうしてシオニズム運動が始められたわけだが、当初ユダヤ人はこの考えを受け入れることを嫌った。というのも、彼らの多くは今現在住んでいるところに同化しようと必死だったからである。フランス国内では参政権も与えられるなど次第に「解放」が進む中、独立国家建設を声高に叫ぶとかえって反ユダヤ主義の風潮を強めるのではないかというおそれがあったためである。さらに、ディアスポラも「神の意志」であると考える超正当派ユダヤ教徒は独立国家建設は神の意志に反するとしてシオニズム運動に反対した。

しかしヘルツルは素早く行動を起こす。本を出版してからわずか1年半後にスイスのバーゼルで第一回国際シオニズム会議を開催。「シオニズムはパレスチナの地にユダヤ人のための国家を創設することを目的とする」といった内容のバーゼル綱領を採択。シオニズム運動は次第に具体的な形にあらわれることとなる。

当初シオニズムは独立国家建設をパレスチナよりも重んじ、ウガンダなどにユダヤ人国家を作るという案もあったら

<sup>\*1</sup> 同時期に、現代ヘブライ語の祖と呼ばれるベン・イエフェダも活躍。ある意味現代イスラエルの父祖たるこの2人の名は、現在イスラエルの各都市で主要な道路の名前において見ることができる

しいが、やはり約束の地ということで「パレスチナに独立国家を」ということが最終目標となった。世界各地のユダヤ人がパレスチナへの移住を始める<sup>\*2</sup>と同時に、ユダヤ人の富豪を中心に「ユダヤ民族基金」を設立し、入植のために必要なパレスチナの土地を組織的に買い漁った。現在イスラエル国内で最大の都市テルアビブはこのころから発展を始めた非常に新しい街である。

一方で、パレスチナに戻ることも可能性を求めてアメリカに移住したユダヤ人も多い。

## 5.2 第一次世界大戦の勃発

### 5.2.1 その概要

1914年に第一次世界大戦が勃発した。そのきっかけは、同年ボスニアの首都サラエボでオーストリア皇太子夫妻が暗殺されたことによる。オーストリアはこの暗殺の背後にセルビア政府の存在があったと主張し、同国に宣戦を布告。戦争が始まった。ただしこれはあくまで開戦の理由付けにすぎない。その後世界大戦までに発展したのは列強諸国の激しい対立という背景が既にあったのはいまでもない。この戦争は事実上、ドイツ・オーストリア・イタリアの「三国同盟」と、イギリス・フランス・ロシアの「三国協商（連合国）」の争いだったといえる。

戦争は長期化し、各国とも植民地も含めた、まさに総動員で戦争にあたる。そんななかオスマン・トルコが同盟国側にたって参戦。東西の交通の要所であるスエズ運河の確保の必要があるイギリスは、反トルコ感情の強いアラブ人を利用してトルコを攻撃することを思いつく。と同時にアラブ人の協力を得るために交わした約束と相反する約束をユダヤ人、列強諸国とも交わす。戦争は結局連合国側の勝利に終わるが、イギリスが交わした約束が原因となり、後の「中東問題」へと発展してゆく。

### 5.2.2 イギリスの三枚舌

戦況を有利に進めるため、イギリスは各方面に無責任な外交政策を展開。その一つ一つを順に追ってみてゆくことにする。

ひとつは、イギリスがフランス、ロシアと1916年に結んだサイクス・ピコ条約である。これは戦争後のアラブ地域の分割に関する取り決めであった。具体的には、フランスがイラク北部、シリア、レバノン、イギリスが中部から南部にかけてのイラク、ヨルダン、パレスチナ南部を戦後に管理し、パレスチナ北部を国際管理下に置くというものだった。

ふたつめは、メッカの太守アル・シャリーフ・フセイン<sup>\*3</sup>との約束（マクマホン宣言と呼ばれる）で、戦後東アラブに独立国を作ることを許可し、さらに、シリア、パレスチナ、アラビア半島をアラブ人のものと認める内容であった。当時フセインがアラブ民族主義を強く主張するなどアラブ系諸民族の独立運動が高まっており、特にオスマントルコの支配下にあったトルコ地方においてその勢力が強かった。同盟国側にたったの参戦を表明していたオスマントルコへの牽制、攻撃としては最適なフセイン及びアラブ人をイギリスはうまく利用したわけである。またこの約束の意図はなにもアラブ戦線でトルコを攻めるだけでなく、戦後西アジア地方に親イギリスの王国を作るという目的もあった。なお、1920年にフセインの息子ファイサル1世が連合国側の一員としてダマスカスに入城、「アラブの反乱」を起こしたが、映画「アラビアのロレンス」はこのころが舞台となっている。

みっつめが、在イギリスのユダヤ人と1917年に交わした約束である。これは、ユダヤ人のパレスチナ入植と独立国

<sup>\*2</sup> 念願の「約束の地」に着いたユダヤ人を待っていたのは、先住民のパレスチナ人（パレスチナ地方に住むアラブ人）であった。当時移住したあるユダヤ人青年が友人宛ての手紙には、パレスチナ人のことを指して「何で約束の地に肌が黒くて奇妙な建物に住んでいる変なやつがいるんだ」みたいなことが書かれている

<sup>\*3</sup> 1999年死去したヨルダン国王フセインの曾祖父にあたる

家建設の保証を約束するもので、バルフォア宣言と呼ばれる。その目的は、ユダヤ人の経済協力を得ることと、戦略上重要なスエズ運河近辺に「イギリス寄り」の地域を作るためである。無論、アラブ人を味方に付けた理由にも後者は含まれる。

既にこの時点でパレスチナの地はユダヤ人のものかアラブ人のものかわからなくなっている。両民族は、パレスチナという土地でお互いが接触もしくは衝突するという可能性は十分に知っていたのだが、マクマホン、バルフォア両宣言で自分たちの民族の権利が十分保証されていた（しかも超大国イギリスに、である）ため安心して各行動に移したようだ。しかし、ユダヤ人側とアラブ人側に説明した、ユダヤ人、アラブ人に関する権利の度合いは両宣言間に明らかな、しかも大きな違い・矛盾があった。簡単にいうと、どちらにもパレスチナの地において自分たちの国の建設及び自治を認めてしまっているのである\*4。ユダヤ、アラブ両民族にいい顔をしたこの作戦は、後に中東問題を生み出すこととなる。

因みにこの時バルフォア宣言では、作ってもよいと保証されているものは“National Home in Palestine”となっている。「国家」をあらわす“Nation”でなく“National Home”とし、さらに“on Palestine”でなく“in Palestine”と表現している。これをユダヤ人は、当然のことだが「パレスチナの地に独立国家をつくってもよい」と解釈したが、イギリスとしては「パレスチナの地のどこかに、国家ではないけれど、居場所みたいなものをつくってもよい」という意味にもとれるとした逃げ道を、姑息にも既に用意していたのである。

## 5.3 各国の戦後

### 5.3.1 イギリス

戦後、イギリスはサイクス・ピコ条約の変更をフランスに申し出た。その内容は、

- イラク北部
- パレスチナ全土

もイギリスの領土にするというものであった。サイクス・ピコ条約は締結当時で既にアラブ・ユダヤ両民族との約束と相反するものであったがここにきてさらに理不尽な条約となった。というのも、大国イギリスにとって重要なのは当時比較的弱い勢力であるアラブ・ユダヤ民族などの約束よりも大国フランスとの意見調整や、中東に眠る莫大な石油資源だったからである。

比較的中東における発言権の強かったイギリスのこの要求をフランスは受諾。これらをイギリスの統治領とすることを国際連盟も追認した。

### 5.3.2 アラブ人勢力

フセインの子ファイサル1世もこれらの自体を傍観していたわけではない。東アラブに独立国を作ろうと懸命に努力するが、シリアとレバノンを委任統治領としていたフランスと対立。フランスの圧倒的な軍事力によりファイサル1世はあえなく追放され、南に追いやられてしまう。

しかし1921年、フセインの次男アブドゥッラーは現在のヨルダンの首都であるアンマンに進撃。その後イギリスは、パレスチナの地の東半分（ヨルダン川以東）をアブドゥッラーに差し出すという妥協案を思いつく。独立国家の建設を第1に考えていたアブドゥッラーはあっさりこれを受諾。イギリスの援助のもと「トランス・ヨルダン首長国」を成立

\*4 正確には多少違うが、主旨としてはこういったことである

させ、自らがその首長となった。1925年には南部のアカバ地方等を併合し、現在のヨルダンの基礎をつくる。

このころからユダヤ人の入植者がヨルダン川以西で急増するが、組織的に土地を買い漁るユダヤ人の登場により、畑を失って労働者となるアラブ人が出現する一方土地成金も現れ、貧富の差が激しくなり、不満を募らせたアラブ人はたびたびユダヤ人と衝突を起こす。もちろんこの衝突は、イギリスによって保証された「自分たちの土地」に新参者が我が物顔に振る舞っているせいでもあった。時と共に入植者は増し、事態は深刻化する一方であった。

なお、一連のイギリスの政策により、パレスチナ地方が「パレスチナ」として初めて政治的単位を持つようになった。このことにより、先住のアラブ人は、「大シリア人」から「パレスチナ人」への自覚を次第に持つこととなる。

### 5.3.3 ユダヤ人

1922年にイギリスのパレスチナの委任統治が認められ、世界各地からユダヤ人を移民させた(いくつかの相反する約束をしたとはいえ、ユダヤ人の経済力を必要とするイギリスは一応の約束を守り、ご機嫌をとる必要があった)。1917年には56,000人だったパレスチナのユダヤ人は、1929年には156,000人に膨れ上がった。先住のアラブ人と衝突の可能性があるにもかかわらず、移住が続いたのはもちろん大国イギリスがバックにいたこともあるが、アラブ人もそのうちユダヤ教のすばらしさを理解して改宗するだろう、という自惚れがあったことにもよる。

## 第6章

# 第二次世界大戦（1939～1945年）前後

第二次世界大戦中には、人類史上稀にみる大虐殺がおこる。被害者はユダヤ人であり、6,000,000人あまりの犠牲者を出したといわれる。この悲惨な体験がユダヤ人のための独立国家建設の運動をますます盛んにさせ、1948年にユダヤ人はついに独立を果たすが、中東を巡る問題はますます複雑になっていった。

### 6.1 ヒットラー及びナチスドイツの台頭

1929年、アメリカで始まった恐慌は瞬く間に世界に広がり、特に第一次世界大戦の敗戦国ドイツに壊滅的な打撃を与えた。このころドイツで勢力を伸ばしつつあったナチスのアドルフ・ヒットラーは第一次世界大戦におけるドイツの敗北とそれに伴う今日のドイツの経済破綻はユダヤ人にあると主張。1933年の首相就任後、組織的に大規模なユダヤ人撲滅計画を実施する<sup>\*1</sup>。これが歴史上名高いユダヤ人の大量虐殺（ホロコースト）のはじまりである。この6年後、1939年にドイツ軍はポーランドへ侵攻、第二次世界大戦が勃発した。

### 6.2 ホロコースト

ユダヤ人は、ユダヤ人という理由だけで今までとは比べものにならない迫害を受けた。この虐殺がナチスドイツの手によることからドイツを中心としたヨーロッパ全域でユダヤ人が虐殺されたと思いがちであるが、実際に犠牲者が一番多いのはポーランドで、次に多いのがルーマニアである。ポーランドでは300万人中260万人が、ルーマニアでは100万人中75万人がナチスの手に掛かったという。その際、ポーランドの首都ワルシャワから南西257kmの所に位置する街に作られた収容所で特に虐殺がすすめられたが、その街の名は「アウシュヴィッツ」といった。

こういったナチスの凶行をみるに見かねてユダヤ人の亡命を手伝うなど、人道的な立場からユダヤ人のために活動した人は多い。もっとも有名な人物は自らもユダヤ人であるオスカー・シンドラーであろう<sup>\*2</sup>。またエルサレムにあるユダヤ人虐殺に関してまとめた博物館にはユダヤ人のために戦った異邦の人々を記念した植樹がなされている（日本人のものもある）。こういったユダヤ及びナチスに関する問題は手塚治虫の「アドルフに告ぐ」に非常に読みやすくまとめられている。また、文春文庫が完全版の発行に踏み切った「アンネの日記」もこのころが舞台である。

<sup>\*1</sup> しかし彼自身ユダヤ人のクォーターであったことは有名

<sup>\*2</sup> 映画の中で彼の墓にユダヤ人が次々と石をおいてゆくシーンがあるが、今でも彼の墓の上には数え切れないほどの石がおいてある

## 6.3 戦争の終わり

ポーランド侵攻の後、ドイツはイタリア、日本などと同盟関係を結び、ヨーロッパ全土にわたって暴れ回る。が、戦況は次第にドイツに不利となってゆく。敗戦濃厚とみたナチスドイツは、来る世論を考慮し、ホロコーストという事実自体のみみ消しをはかる。各地にあった収容所の破壊、関係書類の焼却、関わった人間の処分などはもちろんのこと、ナチスの手に掛かったユダヤ人が埋葬されている墓を暴いてその死体を焼却し、墓自体も破壊するなどといった信じられないような作戦を展開した。ナチスは世界の歴史からホロコーストという記憶を抹消しようとした<sup>\*3</sup>わけである。このことこそがナチスの犯した最も重い、許されざる罪であると僕は考える。結局 1943 年にイタリアが、1945 年にドイツと日本が降伏して第二次世界大戦が終わった<sup>\*4</sup>。

## 6.4 戦後のユダヤ人

ユダヤ人はあまりにも多大な犠牲を払ったが、その反面世界中の世論を味方につけることができた。よりいっそう団結したユダヤ人によりパレスチナの地に独立国家をつくらうとする動きが強まって次々とユダヤ人が移住を始め、世界各国もこの動きを同情の念で見守る。

そしてついに 1948 年 5 月 14 日、初代首相ダヴィッド・ベングリオンによって独立宣言が読み上げられ、ここにユダヤ人の独立国家イスラエルが成立した。離散の民となってから 2000 年近く、世界中で辛い思いをしてきたユダヤ人が念願の「自分たちの国」を約束の土地に手に入れたのだ。感無量とはまさにこのことであろう。ハッピーエンドとなっ  
てほしい展開ではあるのだが、むしろユダヤ人を巡る問題はこの時からますます複雑になり、世界中を巻き込むこととなる。

## 6.5 戦後のアラブ人

今まで述べたような経緯をたどり、ユダヤ人はようやく自分たちの国を手に入れた。が、アラブ人にとって、ユダヤ人が何年間どこで迫害を受けようと、誰に何人殺されようと、長年自分たちの住んできた故郷を明け渡す道理は全くないのである。「さも当然」のように自分たちの住んでいる土地に侵入してくるユダヤ人に、先住のアラブ人すなわちパレスチナ人やアラブ諸国は強く反発。イスラエルの建国宣言の同日にパレスチナに侵攻し、第一次中東戦争が始まった。

---

<sup>\*3</sup> 日本の雑誌「マルコ・ポーロ」が廃刊になったのもこのことと非常に関係が深い。が、ホロコーストの存在に関する細かい議論はここではしないことにする

<sup>\*4</sup> 第二次世界大戦に端を発する紛争や闘争が世界各地で今も絶えないことから、「第二次世界大戦は今もって継続中」とのコメントを出す学者もいるらしい

## 第7章

# 第一次中東戦争（パレスチナ戦争、'48～'49） 前後

第二次世界大戦終了後、息をつくヒマもなくイスラエルは第一次中東戦争を経験する。そしてさらに3つの紛争を経て今にいたる。中近東と聞くとどうしてもキナ臭いイメージが拭えないが、そのイメージはこの第一次中東戦争をきっかけにかたちづくられたものであろう。

また、これ以降は「19xx年」を「'xx年」と表記することにする。

### 7.1 第二次世界大戦の終了からイスラエルの独立まで

ナチスドイツのホロコーストによってユダヤ人のパレスチナへの「帰国」熱が高まったことは既に述べたが、このことはパレスチナの地におけるユダヤ人とアラブ人の抗争のさらなる激化を招いた。この自体を收拾しきれなくなったイギリスは、問題解決をできたばかりの国際連合（以下、国連とかく）に委ねる。つまりイギリスはパレスチナ地方の経営を破棄したのだ。これを受けて国連は'47年に、パレスチナをアラブとユダヤの二つの国とする決議を採択する。領土としては、

- ウェストバンク等をアラブ人に
- それ以外の地域をユダヤ人に
- お互いに譲れない聖地エルサレムおよび周辺地域は国際管理下に

といった形で分割された<sup>\*1</sup>。そして翌年、イギリスの統治が終了すると同時にイスラエルは建国を宣言した。

### 7.2 戦争の勃発

当然のことだが、先住民のパレスチナ人及びその「兄弟」であるアラブ各国はこの採決に強く反発する。'45年にはアラブ連盟<sup>\*2</sup>が結成されていたこともあり、この各国は直ちにイスラエルを攻撃する。これが第一次中東戦争（パレスチナ戦争）のはじまりである。

自由の国アメリカに可能性を求めて移住したユダヤ人が多かったことは前に述べたが、そのせいもあってアメリカはこのころから親ユダヤの立場をとってきた。この時の戦争もアメリカはイスラエルに随分肩入れをする。その甲斐あっ

---

\*1 でも、実行には一度も移されていない

\*2 エジプト、シリア、レバノン、ヨルダン、イラク、サウジアラビア、イエメンの7カ国から成る

て戦況はイスラエル有利に進み、国連がアラブ国家に認めた土地の約半分をイスラエルが占領し、'49年に休戦協定が結ばれ戦争は終わった。

この戦争の後、イスラエルは国連加盟を認められ、首都をエルサレムとした。

## 7.3 戦争後の領土

### 7.3.1 エルサレム

休戦協定には、エルサレムを東西に分割し、旧市街地を含む東エルサレムをヨルダン管理下に、西エルサレムをイスラエル管理下にすることが盛り込まれていた。ユダヤ人最高の聖地「嘆きの壁」はヨルダン管理下になり、行くことを全く許されなくなったのだ。翌年イスラエルは「エルサレムは永久に首都である」との声明を発表しているが、もうエルサレムは他人の手に渡さないという思いと、いつか東エルサレムを奪還するという意気込みが感じられる。

一方でヨルダンは、エルサレムを「アンマンに次ぐ第2の首都」とした。

### 7.3.2 その他

戦争でアラブ国家はずいぶんとその領土を失い、残されたのはウェストバンクと、ガザ地区のみであった\*3。ここで、すでにイギリスからの独立を果たしていたヨルダン（トランス・ヨルダン王国）は国名を「ヨルダン・ハシミテ王国」と改称。翌'50年4月には東エルサレムを含むウェストバンクを併合する。

戦乱のどさくさに紛れてウェストバンクを自国に併合したヨルダンは周辺諸国から強い反発を招く。結果、国王アブドゥッラーは'51年に暗殺されてしまう（この時彼の孫フセインも側にいたが助かっている\*4）。このあとアブドゥッラーの息子タラールが即位するも病身のためすぐに退位してしまい、'52年には激動の中東の時代を生き、昨年'99年に死去したフセイン国王が即位した。

## 7.4 難民問題の発生

アラブ人及びアラブ諸国のイスラエルに対する怒りはすさまじいものがあっただろうが、戦闘能力のない市民は攻撃に参加することなどより戦火に巻き込まれない方が重要である。戦場となった、またはなるおそれのあった地域に住んでいたアラブ人（すなわちパレスチナ人）は次々と避難を始めた。難民の発生である。難民はヨルダンを中心として近隣アラブ諸国に避難していった\*5。

この戦争によりイスラエルがかなりの土地を手に入れたことは前にも述べたが、戦争後、周辺アラブ国に避難していた難民のこれらの地域への帰国をイスラエルは拒否する。難民たちは、自分たちの生まれ育った故郷に帰ることすら許されなくなったのだ。

こういった難民に関して、イスラエル側とアラブ側の見解は大きく異なっている。イスラエル側は、「彼らは兄弟たるアラブ人指導者の命令に従い、自主的にアラブ諸国へと移動した」と主張するし、アラブ側は「彼らはイスラエル軍の攻撃及び脅迫によってアラブ諸国へ移動させられた」と主張する。筋道としてはアラブ側の主張の方が真実に近いであろうが、難民を厄介者扱いし、責任をなすりつけあって難民を引き取らせようとする態度はどちらも同じである。「兄弟」と信じていた周辺諸国によって邪魔者扱いされ、難民たちは次第に「アラブ人」よりも「パレスチナ人」という

\*3 ウェストバンク（東エルサレムまで）はヨルダンに、ガザ地区はエジプトに属した

\*4 彼は胸のペンダントのおかげで凶弾に倒れずにすんだらしい

\*5 ヨルダンはこれだけで約35万人の難民を抱え込んだ

自覚を強めてゆくことになる。

国連ももちろんこういった問題を無視してはいない。’48年に国連は、難民の帰還権を認め、帰還が不可能あるいは望まない者には金銭的な保証がされるべきとの決議を採択している。だがイスラエルが難民受け入れを拒否し、避難先でもよくは思われていないことは既に述べたとおりである。結局難民は国連に頼らざるを得なくなる。

’49年に国連は「国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）」を発足させ、’50年から食料、医療、教育の面で活動を始める。この活動はもちろん今になっても続いており、この機関の統計では’88年になっても難民が230万人いるとしている。難民問題が発生してから今現在まですでに50年近く経過しているため、キャンプでは第3、第4世代が誕生したり、家を建てたりする者もあらわれた。だから中には家の中にテレビのある難民生活を送っている者もいるというわけである。が、いまだ80万人が本当のキャンプ生活、すなわちテントの中での生活を強いられているという。

## 第 8 章

# 第二次中東戦争（スエズ動乱、'56～'57）前後

第二次世界大戦が終わって 10 年ほどたったこのころは、アメリカ・ソ連間の「冷戦」のかたちをはっきりとあらわれたころでもある。第二次中東戦争を境に、中東諸国はイギリス・フランスよりもアメリカ・ソ連の影響を強く受けることになる。また、これまで以上にエジプトの影響も強くあらわれることとなる。

### 8.1 ナセル大統領の登場と戦争の勃発

'52 年エジプトで革命が起こり、ナセルがエジプトの実権を握り、大統領に就任する。ナセルという男はこの時から歴史の表舞台に登場したのであるが、以来中東の情勢に大きく関わりを持つこととなる。

就任して間もない'56 年には、本当に長い間忘れられていた「エジプトの栄光」を取り戻すべく、インド洋方向の生命線であるスエズ運河を国有化。運河会社の株の大半を持つイギリス・フランスの受けた衝撃は非常に大きかった。

おりしもイスラエルはナセルの登場以降、ガザ地区からのゲリラ攻撃に手を焼いていて、ここにイギリス・フランス・イスラエルの利害が一致。共同作戦をとるとともにイギリス・フランスはエジプト本土に、イスラエルはシナイ半島に進撃した。第二次中東戦争（スエズ動乱）の勃発である。

### 8.2 各国の動き

当初、イギリス・フランス・イスラエルの思惑通りにことが進んだ。が、ここに彼らの思っていなかった展開が訪れる。アメリカ・ソ連の干渉である。

ソ連は、これを機に中東への発言力を強めようとして、軍事介入を仄めかしてまで軍隊の即時撤退を要求した。ここでソ連の中東への進出を最も警戒していたアメリカが事態の早期収拾を求めることはごく自然な流れといえる。「冷たい戦争」と呼ばれるほどお互いに対立しているアメリカとソ連が軍隊の撤収という点で奇妙にもここで利害が一致し、かくしてイギリス・フランス・イスラエルに世界 2 大国の圧力がかかることになり、これを受けてイギリス・フランスはその年の年末に、イスラエルは年明けに、エジプト本土・シナイ半島から撤退していった。

これをきっかけに、中東に関する諸問題でイギリス・フランスは完全に脇役に回った\*<sup>1</sup>。代わってでてきたのがいわずとしたアメリカとソ連であり、中東は冷戦の構造にしっかりと組み込まれてしまうこととなる。

なお、スエズ運河の強引な国有化を押し切り、イギリス・フランス・イスラエルの強力な軍勢力を相手に真っ向からやり合い、ついに彼らを撤収させたエジプトは一種英雄のような扱いを受け、第 3 世界のリーダー的存在になる。

そのせいもあって、'60 年代には「AA 連帯（アジア・アフリカ連帯）」をスローガンに民族主義、半植民地主義が盛

\*<sup>1</sup> フランスの領土であったシリア・レバノン両国は既にフランスからの独立を果たしていた

んになる。’61年にはアルジェリアがフランスからの独立を果たしている。

当然のことだが、世界各国のユダヤ人のイスラエル移住はこの間も続いている。’29年のこの地のユダヤ人人口は156,000人であったのだが、独立当時の’48年には650,000人であり、’60年には1,900,000人になり、そして’65年には2,300,000人にもなった。国としてのイスラエルの存在は次第に確固としたものになっていった（既成事実化した、という言い方もできるが）。

### 8.3 パレスチナ解放機構（PLO）の誕生

またまた当然のことで、難民問題も継続中である。中には急激に需要の高まった石油産業で成り上がる者もいたが、大多数は不便な生活を強いられていた。イスラエル側は「彼らはアラブ人なのだから、アラブ諸国に定住の地を見いだせばよい」などと相変わらず無茶苦茶なことを主張しているため難民はアラブ諸国に行かざるを得ない。しかし、避難先で同情・歓迎されないことは前にも述べたが、それどころか彼らはそこで経済的・社会的安定を脅かすことを警戒され、就職や土地の購入など各種の行動が制限された。

アラブ諸国がそうせざるを得ないことは我々にも納得できないこともないのだが、難民にとっては悲惨の極みである。自分たち難民が、表面上は「兄弟」と呼んで（呼ばれて）いるアラブ諸国からどのように扱われているのかを、第一次中東戦争より若い眼でしっかりと見ていた者たちを中心に、「アラブ」ではない「パレスチナ民族主義」はさらなる昂揚をみせる。そんな若者の中には現パレスチナ解放機構執行委員会議長のヤーセル・アラファトの姿もあった。

彼はカイロ大学で工学を学んでいたが、在学中にパレスチナ学生連合を組織し、そのリーダーとして活躍していたという実績を持つ。難民問題・パレスチナ問題が深刻になる中、彼を中心としたカイロ大学で学んだパレスチナ人により、現在パレスチナ解放機構の中で最も勢力の強い組織<sup>\*2</sup>である「ファタハ」を結成する。

ファタハの目指すところはもちろんパレスチナの解放である。彼らは様々なゲリラ活動を行うことによりアラブ諸国とイスラエルとの緊張を高め、アラブ諸国の重い腰を立ち上げることを作戦としていた。しかし、アラブ諸国はアメリカが背後に控えるイスラエル国及び軍隊の恐ろしさを十分知っていたため、対イスラエルのため立ち上がるどころかアラファトらの行動を好ましく思っていなかった。

そこでアラブ諸国は、アラファト率いるファタハをある組織及び体制内に取り込み、彼らの行動を制御することを考えた。このときつくられた組織こそ、パレスチナ解放機構（PLO）<sup>\*3</sup>である。このような経緯を考慮すればわかることだが、当初この組織はエジプト大統領ナセルの強いコントロール下に置かれ、「事なかれ主義」を全面に出すひ弱な組織だった。

\*2 PLO とは一枚岩の組織でなく、方向性が違ったり対立している組織なども含めた「組織の集合体」としての組織である

\*3 結成は’64年5月で、アラファトが議長に就任したのは’69年のことであった

## 第9章

# 第三次中東戦争（6日間戦争、'67）前後

第一次、第二次中東戦争でも有利に戦況を進めたイスラエルであったが、特に第三次中東戦争においては清々しいほどの大勝利をおさめ、「無敵イスラエル」の神話を作り出す。このあたりから国家や難民などに加え、領土に関しても複雑な問題が起きてくる。有名な「ゴラン高原」が登場するのもここである。

### 9.1 その背景

現在ではパレスチナ人勢力の代名詞のような存在になっている PLO だが、その設立の目的がパレスチナ人の出過ぎた行動の抑制というものであったため結成された当初は何とも情けない機関で、パレスチナの怒れる若者たちを引きつける魅力を全く持っていなかった。が、それと同時に怒れる若者を制御しきることもできなかった。

アラファトらは PLO とは無関係にイスラエルに対するゲリラ攻撃を繰り返す。もちろんイスラエル側もやられっぱなしではなく、報復措置を繰り返しとる。この、ゲリラ攻撃とその報復といった戦いの繰り返されるうち、イスラエルとアラブ諸国間の緊張はいやがうえにも高まっていった。

そんななか、慎重なナセル大統領も行動にでざるを得なくなる。'67年5月22日、エジプトはチラン海峡をエジプト領海とすることを宣言する。その内容は、エジプト領となったチラン海峡はイスラエル船舶及びイスラエル向け戦略物資を積んだ非イスラエル船舶の通行を禁ずる、というものであった。

当時イスラエルはスエズ運河の通行を禁止されていたのでインド洋にでる航路はアカバ湾のみが残っていたのだが、チラン海峡の封鎖によりその道も絶たれてしまったわけである。衝撃を受けたのはもちろんのことであるが、すぐさまその対応に乗り出す。すなわち、エジプトへの攻撃準備である。エジプトの宣言のわずか2週間後（'67年6月）、イスラエル空軍はエジプト空軍基地への爆撃を開始する。第三次中東戦争（6日間戦争）の勃発である。

### 9.2 戦況

この戦争において、アラブ諸国がイスラエル軍の情報をあまり掴めていなかったことに対し、イスラエル軍にはアラブ諸国の情報が筒抜けであった。開戦当時、エジプト空軍基地が迎撃もできぬままにいいようにイスラエル軍に爆撃されたのがいい例である。これによりエジプト空軍はほぼ壊滅状態に陥り、ここですでに勝敗が決まってしまった。

開戦からわずか6日間でヨルダン、エジプト、シリアは停戦を受諾し、戦争は終わった。

### 9.3 領土の拡大とエルサレム奪回

わずか6日間の戦争であったが、イスラエルは非常に大きな戦果を挙げた。領土としてはウェストバンク、シナイ半島（当然ガザ地区も含まれている）、ゴラン高原を手に入れ、領土は4倍近く膨れ上がったのだが、聖地エルサレムを取り戻したのがイスラエルにとっては最も大きな功績だったであろう。

それまでイスラエルが確保していたのは西エルサレムまでで、嘆きの壁を含む東エルサレムの旧市街はヨルダンに占領されていた<sup>\*1</sup>のだが、この戦争によりイスラエルは東西の分断線である休戦ラインのバリケードを撤去、東西エルサレムの統一を果たす。ユダヤ人に、嘆きの壁で自由に祈るといふ、1900年にも及ぶ悲願が<sup>\*2</sup>達成されたのである。

ここにイスラエルは、統一されたエルサレムをイスラエルの永久の首都と宣言し、エルサレム全域にイスラエル法を適用することと全ての聖地を汚すことを禁ずると決定する<sup>\*3</sup>。さらに大勝に気をよくしたイスラエルは少々つけあがり、当時の首相エシュコルは「この戦争で手に入れた土地は、絶対に手放さない」といった主旨の演説を披露したりする。

領土問題に必ずついてまわる難民問題は、もちろんこの戦争においても発生した。ウェストバンクがイスラエルに占領されたことにより、そこの住民はヨルダン領のヨルダン川東岸に次々と避難。ヨルダンの難民人口は74万人に膨れ上がり<sup>\*4</sup>、ヨルダンの政情は不安定になる。

### 9.4 国連の動き

この戦争の事後処理に関して、直ちに国連総会や国連安全保障理事会（以下安保理）などで話し合いが始まり、満場一致で、イスラエルのとったエルサレムに対する措置を撤回すべきと決議。これに対しイスラエルは、占領（イスラエルは「解放」という）を「エルサレムを行政上統合し、そして聖地保護のための法を整備したに過ぎない」と主張する。またこのとき、ヨルダン占領下であった東エルサレムの市議会は解体され、その市長は「治安上の理由」によりヨルダンに追放されていた。

さらにイスラエルは、イスラエルと和平条約を結ぶ意志を示さぬ限り、占領地の解放は絶対にあり得ないと主張する。これは裏返すと、占領地を返還しなければアラブ諸国はいつか和平交渉に応じるだろうというイスラエル側の憶測であったといえる。

しかしアラブ側はそのようにはでなかった。散々にイスラエルに負けておいて、今更和平条約などとアラブ諸国にとっては屈辱以外の何者でもなかったのである。アラブ諸国は和平交渉のテーブルにつくことを拒否し、さらに'67年8月にスーダンのハルツームで各国首脳による会談を開き、「講和せず、交渉せず、承認せず」の原則（「アラブの3つのノー」と呼ばれる）を採択した。

このときアメリカはイスラエルを、ソ連はアラブ諸国を支持していたのだが、どちら側も「占領地と引き替えに和平樹立」という基本線で方針が一致していたので、そのための妥協案づくりをすすめるべく活発な工作が行われた。その結果、'67年11月に「安保理決議二四二」が採択された。

\*1 第一次中東戦争の際どくさきに紛れてヨルダンが、イスラエルからというよりはむしろパレスチナ人から奪った土地である

\*2 神殿崩壊以来は年に一度だけの来訪が許され、ヨルダンの管理中は全く入れなかった

\*3 つまり、聖地への自由なアクセスは国によって保証されたのだ

\*4 当時のヨルダンの全人口が200万人だったというから、これは大変な数である

## 9.5 安保理決議二四二の内容

難民問題や、航空路線の問題など色々なことが盛り込まれているが、重要なのは以下に示す 2 原則である。それらは「中東の構成かつ永続的な平和のため」の、

- 先の紛争において占領された領土からのイスラエル軍の撤退
- 中東地域全ての国が安全で、かつ承認された境界内で平和に生存する権利の尊重と確認

といったものである。すんなりと納得のいく内容に見えるが、ここには国連の猪口才な仕掛けがうたれている。順に見ていくことにしよう。

まず、2 番目の原則<sup>\*5</sup>で「中東地域全ての国が安全」云々とあるのだが、「中東地域全て」には当然イスラエルも含まれている。この決議によって、(アラブ諸国はもちろんだが)イスラエルの存在も、暗に、しかも公的に認めさせているのだ。

次に 1 番目の方の原則である。苦心の末に出された妥協案らしく、実に曖昧な解釈を可能としている。日本文においてそれはあまり伝わってこないが、原文(英語)の方に問題がある。原文には、英語で「領土」をあらわす単語 territories に “the” がついていないのだ。イスラエル側は、“the” がついていないため、「占領した領土」の特定ができないので、ここでいう「占領した領土」とは「占領地の一部」と解釈。一方、当然のことだがアラブ諸国はこれを「全占領地」と解釈。両者のすれ違いは全く終わりを見せなかった。特にガザ地区、ウェストバンクをどうするかで話し合いは'90 年になっても続いている。

なおこの決議は、パレスチナ人に関しては彼らを「難民」としてのみ扱い、民族自決権に関しては一切言及されていないことに PLO は激しく反発する。PLO が決議を受諾したのは、20 年後の'88 であった。

---

<sup>\*5</sup> あくまでこの文章内の話である。本物はどちらが何番目か僕は知らない

## 第 10 章

# 第四次中東戦争 (贖罪日戦争・断食月戦争、'73年)前後

戦後エジプトが、アラブ諸国としては初めてイスラエルと平和条約を結ぶなど、この戦争の後くらいから和平の雰囲気は漂い始める。むしろ第四次中東戦争は、「平和を結ぶために起こした戦争」といった感じである。

なお「石油ショック」はこの戦争を原因に起きた。

### 10.1 エジプトの奇襲

ナセルからアンワール・サダトに大統領が替わったエジプトは、'73年10月6日にイスラエルへの大規模な攻撃を開始した。第四次中東戦争の始まりである。この戦争が「贖罪日戦争」及び「断食月戦争」と呼ばれるのは、開戦当日の日がユダヤ教徒にとっての「贖罪日<sup>\*1</sup>」で、開戦された10月がイスラム教徒にとっての「断食月<sup>\*2</sup>」だったからである。

アラブ諸国の力を軽視し、さらに贖罪日が重なったことによりイスラエル軍は完全に不意をつかれる。まずエジプト空軍が飛来し、それに乗じてエジプト陸軍はスエズ運河の渡航に成功。シリア陸軍もゴラン高原を突破するなど戦況は圧倒的にアラブ諸国に有利に進む。この時エジプト大統領サダトは、「エジプト空軍の爆撃により、第二次及び第三次中東戦争でエジプトが失ったものを全て取り戻した。無敵イスラエル、という神話は永久に葬られた」と手放して喜んだという。

が、やはりアメリカがバックに控えるイスラエルは強い。同国から膨大な武器援助を得て次第に反撃に転ずる。対シリア戦線ではゴラン高原を逆突破し、首都ダマスカスにも迫る。シナイ戦線でもスエズ運河の逆渡航に成功、エジプト陸軍の退路を断った。

### 10.2 石油戦略

この時アラブ諸国が「石油戦略」を展開したのは有名な話である。

第四次中東戦争の戦況がエジプトに不利に転じた直後、アラブ石油輸出機構(OAPEC)が

- 石油生産量を毎月5%ずつ減らす
- ただし、アラブ諸国を支持する国には従来通りの量を供給する

<sup>\*1</sup> 去年一念の罪を悔い改める、ユダヤ教では最も大事な休日。空港も含めたイスラエル国内の全ての施設が休みとなる

<sup>\*2</sup> イスラム教徒は、この月の間、日がでていいるうちは断食する事が義務づけられている

- 親イスラエルの立場をとっているアメリカ、オランダには全面的に輸出を禁ずる

と発表した。発表は石油価格の70%引き上げとほぼ同時になされたため、相乗効果で西側諸国に大ダメージを与えることに成功する。日本経済は、ドル・ショックと重なり大混乱をきたした(オイル・ショック<sup>\*3</sup>)。

日本だけでなく、欧州連合(EC)などもアラブ寄りの立場を表明し、多数のアフリカ諸国がイスラエルとの断交を発表した。イスラエルを世界中から孤立させ、アラブ諸国に自信をつけた石油戦略は大成功だったと言える。が、その後訪れたオイル・ブームにより、貧富の差はますます拡大して社会構造を揺るがし、莫大に流れ込む外貨を求めて国際兵器産業の格好の市場にもなった。

余談ではあるが、このころの日本政府の高官の発言を見比べてみると面白い。開戦直後の10/8には、「安保理決議二四二に基づく平和の確立を望む」などとある。石油戦略の声明が出されたのは10/17のことであるが、その後の11/6には「我が国は武力による領土獲得には反対」であり、「我が国はパレスチナ人の平等と自決を認める国連決議を支持している」との意思表示をしている。さらにその後の11/22には「我が国はいち早くパレスチナ人の平等と自決を認める国連決議を支持していた」と強調し、加えて「今後の諸情勢の推移如何によってはイスラエルに対する政策を再検討せざるを得ないだろう」と、イスラエルに対する警告ともとれる激しい調子の声明を発表している。こうした日本政府の一連の対応は、

「アラブ寄りというよりは、むしろアラブ寄り」  
などと揶揄された。

### 10.3 安保理決議三三八

戦争が始まると直ちに国連で会議が行われ、安保理決議三三八を採択した。内容は

- 12時間以内の停戦
- 停戦後、決議二四二の全ての条項を直ちに履行する

ということ呼びかけるものであった。これによって戦争は終了。イスラエルは占領地を一部譲歩した。結局どちらが勝ったのかよくわからない戦争ではあったが、無敵イスラエルの鼻をくじいたことにより中東諸国(特にエジプト)は、和平交渉のテーブルにイスラエルと対等の立場でつくことができるようになる。

### 10.4 ヨルダンの動向(黒い9月事件)

ここでヨルダンについて少し触れておく。PLOが結成された5年後アラファトが議長に就任し、PLOは次第にその勢力を強めていった。当時その拠点はヨルダンに置かれていたのだが、勢いを増すPLOはそのうちヨルダン国内のもう一つの国家としての地位を強めることになる。

これを受けてヨルダン政府は'70年にPLOに対して正規軍による攻撃を行い、ゲリラ組織を国内から追放した。これを黒い9月事件という。

ヨルダン政府のこの行為は当然のことながらアラブ諸国の強い反感を買うことになり、ヨルダンは孤立する。そんななかヨルダン国王フセインは'73年に、パレスチナ自治国をつくってヨルダンと連合させる「アラブ連合王国」の構想を打ち出す。これがますますアラブ諸国の反感を買う。

<sup>\*3</sup> 例の、トイレトペーパーが無くなったやつである

同年に第四次中東戦争が勃発したのは述べてきたとおりであるが、ヨルダンはこの機にアラブ諸国との国交を回復し、PLOを正式に承認する。ヨルダンが中東和平に積極的に歩みでた瞬間であった。

なお PLO はこののち拠点をレバノン、チュニス、ガザ地区と移動していった。'96年にはパレスチナ暫定自治政府が発足している。

## 第 11 章

# 和平の第一歩（エジプトとイスラエル）

四回の中東戦争を経て、アラブ諸国もイスラエルという国の存在自体を否定することが事実上、不可能となった。存在してしまっただけで、ある程度妥協して彼らと和平交渉をしようという動きが出始める。その皮切りがエジプトであった。

### 11.1 サダト大統領のイスラエル訪問

’77年、エジプトのサダト大統領が突如イスラエルを訪れる。全ての中東戦争においてアラブ諸国のリーダー的存在であり、率先としてイスラエルと争ってきた、いわば宿敵ともいえるエジプトの大統領がイスラエルの地に乗り込んできたのである。首相などの関係者はもとより、これにはイスラエル国民も非常に衝撃を受けた。

エジプト訪問の目的は、もちろんイスラエルとの和平交渉である。遅々として進まない中東和平交渉へのショック療法的な意味で、サダトはイスラエル訪問に踏み切ったのであろう。サダトは、現在の中東問題の7割が軍事、政治的な問題ではなく我々の心の中にあると主張。心の壁を取り除こうと国民に呼びかけ、中東和平交渉の進展をうったえる。

確かにアラブ諸国、イスラエルの双方とも和平は望んでいたのではあるが、エルサレムの取り扱いについて根本的に意見が異なり、彼の訪問の後も中東和平の急速な発展は見られず、結局エジプト・イスラエル間のみの和平にとどまった。

### 11.2 キャンプ・デービッド合意

そんななか’78年9月に、アメリカのカーター大統領・エジプトのサダト大統領・イスラエルのベギン首相が、2週間にわたって合宿、缶詰状態で会談を行う。結果締結されたのが、2つの合意文書からなるキャンプ・デービッド合意である。2つの合意文書とは、エジプト・イスラエルのためのものと、中東・イスラエルのためのものである。

しかし中東問題の解決ではなく、中東和平の進展をねらいとしたこの会談は合意成立を第一目標としていたため、曖昧な点も多い。イスラエルはシナイ半島だけを返せば問題は解決し、中東に平和が訪れると主張しているのに対し、エジプトはパレスチナ問題の解決をもってはじめて平和が訪れると、相変わらずチグハグな議論が展開されたので、パレスチナ住民の自治権やエルサレムに関する諸問題については全くといっていいほど進展はなかった。

### 11.3 平和条約の調印とエジプトの受難

キャンプ・デービッド合意に基づき'79年3月、エジプト・イスラエル平和条約が調印される。アラブの国が、しかもアラブ諸国の親玉であるエジプトが、イスラエルという国の存在をはじめて公的に認めたわけである。

これに対し、アラブ諸国は「裏切り者エジプト」に憤慨。アラブ諸国で首脳会議を開き、OAPEC等の組織からの除名といった様々な制裁措置をとることを決定したほか、アラブ諸国から次々と国交を断絶された。「アラブの盟王」だったエジプトは、一転して「アラブの孤児」へと成り下がった。

そして大統領サダトは、「イスラムの敵イスラエルと単独和平に踏み切り、その一方で経済開発に狂奔し物質主義に溺れたサダトは殺されなくてはならない」として'81年10月、イスラム原理主義<sup>\*1</sup>(ファンダメンタリスト)のグループの凶弾に倒れる。既にその頃は軍内部にまで暗殺組織が浸透していたという。そして皮肉にも暗殺された日は、サダトが最大の功績と辞任していた第四次中東戦争の開戦記念日であった。

サダトの後ムバラクがその後を継ぐが、彼はイスラエルとできるだけ距離をとるという外交作戦をとったため、イスラエルとの関係は急速に冷却化されてしまうことになった。これを「冷たい平和」などといったりする。

---

<sup>\*1</sup> 多くのイスラム教徒は、なぜイスラム教徒がユダヤの国イスラエルに幾たびも戦争で負けたのか、という理由を「コーランの教えを守らず、世俗化しすぎたため神の怒りを買ったのだ」と考えたが、その自己反省がやがて発展して「正しいイスラム教徒としての道を踏み外した政治指導者を打倒し、コーランに基づいた正しい社会をつくるべき」といった考えになった。これをイスラム原理主義という。一部の過激派が暴力的テロ活動を展開することはよく知られている

## 第 12 章

# レバノンにおける情勢（レバノン戦争など）

レバノンという国で 15 年にも及ぶ内戦が行われていたのは有名である。中継貿易の基地として急速な発展を見せた首都ベイルートには近代的なビルが林立し、中東に居ながらにしてヨーロッパのような雰囲気が味わえると日本企業の現地駐在員にも人気が高かったのだが、この内戦により壊滅的な打撃を受けた。今現在は必死の復興作業が進められ、平和への道が着々と歩まれているのだが、街の至る所には弾痕など内戦の傷跡が絶えない。この内戦も、もちろん中東問題に端を発するものである。

### 12.1 黒い 9 月事件以降の PLO と内戦の勃発

'70 年に PLO はヨルダン正規軍からの攻撃を受け、その拠点をヨルダンからレバノンに移すことを余儀なくされた。世にいう「黒い 9 月事件」である。本部は首都ベイルートの西部に置かれたが、この時以降パレスチナゲリラは南レバノンを拠点としたイスラエルへのゲリラ攻撃をたびたび行っていた。

さてレバノンという国は 1860 年にキリスト教徒とイスラム教徒の対立により反乱が起るなど、中東諸国の中では比較的キリスト教の勢力が強い。特にマロン派キリスト教徒の勢力が強く、その政党ファランジスト<sup>\*1</sup>党はレバノンのキリスト教徒の政党の中では最有力であった。

そして'75 年 4 月、ベイルート郊外でパレスチナゲリラのバスがこのファランジストにより襲撃され、27 名が死亡するという事件が起きた。かねてから異なる宗教間で力関係が鬱積していたこともあり、これを機にイスラム教徒対キリスト教徒の 15 年にわたる内戦が始まった。かつてはお互いが仲良く一緒に歩き回った都市が戦場となり、血を流しつつ殺し合う事態が発生してしまったのである。これによって首都ベイルートは東西に分断されてしまった。

### 12.2 レバノン戦争の勃発

一方イスラエルでは、南部レバノンに拠点を置くパレスチナゲリラの攻撃に手を焼いていた。しかし、レバノンで発生した内戦に乗じて同地に派兵し、パレスチナゲリラ及び PLO を軍事・政治的に攻撃し、その勢力を一掃することをイスラエルは思いつく（もちろん、当時イスラム勢力と戦っていたキリスト教勢力との共同作戦の下である）。またそれと同時にレバノンに親イスラエルの政権を樹立させるという思惑もあり、'82 年 6 月、イスラエル軍はレバノンに侵攻する。レバノン戦争の勃発である。

その真の目的は上にあげたとおりであるが、表立った理由は「北部イスラエル住民の、ゲリラ攻撃からの保護、及び

<sup>\*1</sup> マロン派キリスト教徒によって編成された民兵をこう呼ぶこともある。どのみち「ファランジスト」はマロン派キリスト教徒のグループである

駐英イスラエル大使が何者かに狙撃されたことに対する報復」となっている。

イスラエルは西ベイルート\*2を包囲（ベイルート侵攻）し、2週間にわたってベイルートとレバノン南部のパレスチナゲリラ基地を爆撃。民間人にも500名の犠牲者を出したといわれている。

度重なるゲリラ攻撃でイスラエルを困らせたとはいえ、パレスチナゲリラは所詮イスラエル正規軍の敵ではなく、文字通り蹴散らされてしまう。イスラエルはパレスチナゲリラの撤退条件について交渉し、1万人にも及ぶゲリラをアラブ各国に、PLOの拠点をチュニジアに移すことに成功する。PLOは壊滅的な被害を被った。

## 12.3 和平への試み

話は前後するが、レバノン戦争の勃発直後の'82年7月、アメリカ大統領レーガンが新中東和平案を発表。キャンプ・デービッド合意よりもアラブ寄りの内容となっていて、ウェストバンク、ガザからのイスラエル軍の撤退などを盛り込んでいた。

これを受けてアラブ諸国は逆提案（フェズ提案と呼ばれる）を発表。レーガンの提案が反対しているパレスチナ独立国家樹立などについて触れているが、このようなやりとりから平和につながる妥協案が生まれるのではないかと、という雰囲気になる。

しかしその直後、パレスチナ人に未曾有の悲劇が降りかかり、このような雰囲気は消し飛ぶこととなった。

## 12.4 大虐殺

その悲劇とは、ファランジストによるパレスチナ難民の大虐殺である。レーガンの提案からわずか2ヶ月後の'82年9月のことである。きっかけはPLOの西ベイルート撤退から2週間後に、就任直前の次期レバノン大統領が暗殺されたことによる。彼はキリスト教マロン派のリーダーで、以前からイスラエルとコンタクトのあった男だった。

当時イスラエルと共同作戦をとっていたマロン派民兵は難民キャンプ内にもいたのだが、自分たちのリーダーを殺され、復讐の血に飢える彼らを、イスラエルは知ってか知らずか難民キャンプに入れることを許可していたのである。彼らは怒りの矛先をパレスチナ難民に向ける。女であろうと年端の行かぬ子供であろうと、手当たり次第に銃やナイフで難民を殺戮して回ったのである。イスラエル兵はキャンプ内で「異常事態」が起こっていることに気づくことはできたのだが、もはや止める手だてではなかったらしい\*3。

なお、暗殺された大統領に代わって就任した男は大変無能で、親イスラエル政権樹立のためイスラエル軍はレバノンに長く駐留せざるを得なかった。その間たびたび武力衝突が起き、犠牲者を出している。

## 12.5 現在に至るまで

レバノンの内戦の收拾のための国会議員競技会がサウジアラビアのタイフで開かれるなど、和解が進む中、'89年にレバノン大統領が軍人内閣を率いていたキリスト教マロン派の將軍を軍司令官から解任し、さらに全民兵組織にベイルート退去を命じ、内戦は終結した。内戦終結後は、アラブ諸国特にシリアとの関係を重視し、友好関係につとめて

\*2 PLOがヨルダンから移した拠点のあるところである

\*3 あるイスラエル兵が、あるファランジストに

「なぜ女子供まで殺すのか」

と聞くと、彼は

「女はテロリストを産むし、子供はテロリストに育つからだ」

と答えたという

いる。

'99年9月現在には渡航延期勧告及び注意喚起が日本政府より発令されていたが、'00年8月にイスラエル軍がレバノン全土から撤収するなど、この国は内戦以降平和に向かって確実に動き出している。ダメージを受けたビルは目立つが、現在のベイルートには平和な時が流れている。

## 第13章

# パレスチナ人をめぐる状況

エジプト・イスラエル平和条約調印により、パレスチナ人は自分たちが民族自決権を得るためにはアラブ諸国に任せきりでなく結局自分たちの手でなんとかせねばならないということに気づく。'88年頃からインティファダと呼ばれるパレスチナ人の大衆蜂起が非常に盛んになるが、これはこのことをよくあらわしているといえる。

### 13.1 蜂起の背景

難民たちの生活は想像以上に厳しいものがある。不便な生活だけならばまだしも、住み慣れた土地に帰ることすら許されないのである。しかも、将来的にも故郷に帰ることのできる保証は全くされていなかった。中には村からの立ち退きを命令された後に、その村がイスラエルによって公的に接收されたり爆破されたりし、ユダヤ人の入植が進んで「ユダヤ人地方都市」となったようなケースもあった。

しかし占領地における生活は、それ以上に厳しい（というよりは、屈辱的な）ものがあった。外出や集会などのたびに軍の許可を得なければならないし、そればかりかあるパレスチナ人の子供が見回りのイスラエル兵に投石すると、イスラエル軍はその子供の家族の家をブルドーザーで破壊したりダイナマイトで爆破するなどの「粛正」の措置をとったりした。少しでも不審な行動をとれば軍に身柄を拘束され、裁判もないまま何年も服役するなどということも多くあった。

さらに、占領地においては、閉塞的な経済が支配していた。というのも、占領下という状況柄外部からの融資は受けにくい状態なので工業の発展は望めないし、水道設備がイスラエルに押さえられている以上パレスチナ人は制限された水量を汲むことしか許されていないので、水の安定した供給ができない（雨量の多寡に大きく左右される）ため農業も発展しにくい。また、周辺産油国もいまいち下り坂であったので出稼ぎの道も閉ざされていた。

そんな彼らに残された道は、イスラエル側の「日雇い労働者」になることだった。知ってのとおり、青空市で売買される労働力は余りにも安く、労働者にとってその日の仕事にありつける保証もなく、病気を患えば一巻の終わりと、日雇い労働は悪い条件づくめである。しかし、上にあげた理由により、彼らは日雇いにならざるを得ない。さらに「どうせイスラエルの日雇いになるのだから」という思いが蔓延し、教育もおろそかになっていった。悪循環である。

### 13.2 インティファダの大流行とPLO

つもりにつもった彼らの不満・怒りはついに爆発する。'88年頃から大衆蜂起、インティファダが各地で非常に盛んになる。これをきっかけに、パレスチナ人の民族意識は確実に変わっていった。以前は反イスラエルのデモ行進をする息子を必死に止めていた母親自身がイスラエル兵にくっついてかかるようになり、禁止されているパレスチナ国旗の掲揚

も各占領地で見られるようになる。

インティファダの流行に伴い、PLO は素早く反応し、「占領が終了するまで蜂起を続けよ」との檄を飛ばしたり、全てのインティファダは PLO の指示に基づくとの声明を繰り返し発表した\*1。

またそのうち、インティファダ全体を統率する「蜂起統合指導部」なる組織も結成され、地下指令が繰り返し末端組織に与えられた。具体的には指定した日時における武力蜂起やゼネストの実行などである。インティファダがきわめて長時間実行され続けたのも、この秘密組織（もちろん末端の組織やそのネットワークも含めて）の存在によるところが大きい。

この組織の壊滅のため、イスラエル軍は摘発に躍起になっているが、イスラエル軍ですら組織の動きは掴み切れていないらしく、当然のことではあるがこの組織の細かい構造や正体などは今もって闇の中である。

### 13.3 パレスチナのイスラエル人

イスラエルには、イスラエル国籍を持つパレスチナ人も数多く存在する。イスラエル占領下で生を受けた人間などである。彼らは参政権を持つなど、ユダヤ人と同等の権利を与えられているものの、パレスチナ人居住区（パレスチナ人社会）に居るがために十分な教育が受けられない、等の問題が起きている。さらに彼らは、イスラエル側からは「パレスチナ人」と、パレスチナ側からは「イスラエル人」と見られ、双方に敵視されてしまっているため、自らのアイデンティティーの確立に関し非常に難しい立場に置かれている。

また、当然ながら彼らのパスポートはイスラエルのものであるため、イスラエルと国交のないエジプト以外のアラブ諸国に行くことも許されていない。

---

\*1 だが、飛び火的に発生した地域を考えるに、これはハツタリであろう

## 第 14 章

# 周辺諸国の動きのまとめ

このあたりからイスラエルを巡る中東の問題は、イスラエルと PLO の話し合い、というかたちになっていき、アラブ諸国は脇役とまでは言わないものの主役ではなくなった。が、アラブ諸国を巡る事件が無くなった訳ではない。現在に至るまでの出来事をまとめた。

### 14.1 2つの戦争

#### 14.1.1 イラン・イラク戦争

イラクとイラン皇帝の間には、アルジェ協定と呼ばれる協定が結ばれていた。これは、イラン皇帝がイラク北部のクルド人独立運動を助けることをやめる代わりに、イラクはシャテルアラブ川の中流を国境として認めるといったものだった。

さて'79年、悪名高いサダム・フセインがイラクの新大統領の座につく。アラブ世界の長となる野望を胸に秘める彼はまずはイラク石油株式会社を国有化し、そして翌年シャテルアラブ川はイラクの領土であると主張した上にクルド人も鎮圧した。ここからイランとイラクは9年間にも及ぶ戦争に突入する。イラン・イラク戦争である。

戦火はペルシャ湾にまで広がり、市街地にもミサイルが撃ち込まれるなど泥沼化の様相を呈していたが、'88年には停戦が実現し、'90年にイラクがイラン側の和平条件を受け入れて、戦いは終了した。

#### 14.1.2 湾岸戦争

息もつかぬ間に、'90年8月、イラクはクウェートの国境にある油田問題をめぐり、クウェートを侵略する。国連安保理事会は再三イラクの撤退を要求したがイラク側はこれを拒否。'91年1月、アメリカを主力とする多国籍軍のイラク空爆が始まったが、これが湾岸戦争である。

同年2月にはクウェートからイラクが一掃され、停戦が成立した。

### 14.2 ヨルダン

第四次中東戦争をきっかけにこの国は確実に和平への道を歩き始めたといえる。イラン・イラク戦争、湾岸戦争ではイラク側につくなどして周辺国との関係が悪化したりもしたが、'94年10月にはイスラエル・ヨルダン平和条約が結ばれてイスラエル・ヨルダン間の陸路国境が開設されるなどと、和平には前向きである。今後この国は、全人口の半分以上を占めるパレスチナ人をいかに体制内に取り込んで不安定な要因をなくすか、といったことが課題となるであろう。

なお、イスラエルとの和平後は世界中から観光客がどっと訪れるようになり、この観光産業に今ヨルダン是最も期待をかけている。

## 14.3 シリア

### 14.3.1 アサド体制

第三次中東戦争においてこの国は、古来より肥沃な土地であり、戦略上の要所であったゴラン高原を失ってしまうが、戦後の方針をめぐる対立が起きたことをきっかけに、このころからアサド体制ができあがる。今現在もこの体制は続き、町中は至る所にこれでもかというほどアサド親子のポスターが貼ってある。

### 14.3.2 国としての動き

サダトエジプト大統領のイスラエル訪問をきっかけに、この国はリビア、アルジェリア、PLO などのアラブ強硬派との結束を強めている。方針としては完全に反イスラエル派で、イスラエル軍のレバノン侵攻では、レバノンをシリアの領土の一部と見なしていることもあり、レバノンに派兵している（しかしイスラエル軍にいいようにやられ、大損害を被っている）のだが、「ユダヤ人に侵略・占領されたパレスチナをアラブの手に取り戻す」という目標を全く達成できず、そればかりか「アラブは狂信的なテロリスト」というイメージを強め、国際的に孤立してしまったこともある。

しかし、湾岸戦争時にクウェート解放のための軍事力を投入したことで外交上の勝利を得て、それ以来この国は立場としては対イラク戦略の重要な西側の同盟国となってきている。

また'94年1月にアサド大統領はクリントン大統領と会談し、和平実現を望む姿勢を初めて示している。それ以降、基本的には中東和平ということをサポートしてはいるが、あくまで「平和と領土の交換」を原則にした和平の達成が必要という立場をとっている。つまり、ゴラン高原の返還を強く求めているわけである。今現在、ゴラン高原は国連の管理下にあり、当地に関する話し合いも行われていない。

## 第 15 章

# ユダヤ人とアラブ人

これまで述べてきたように、ユダヤ人とアラブ人は民族や宗教、国家をめぐって数え切れぬほどの戦いを経てきた。ここでは一連の戦いの後、すなわち今現在のユダヤ人とアラブ人をめぐる状況を、戦争を基準にせず述べることにする。

### 15.1 ユダヤ人の気持ち

エジプトのサダト大統領は「中東問題の 7 割は、我々の心の中にある」と言っていた。全くその通りであるとは思うのだが、自分たちの故郷を突如奪われたアラブ人と、待ちに待った自分たちの独立国家建国の日に攻撃されたユダヤ人の心の中の問題は容易に取り除けるものではない。

基本的に、ユダヤ人はアラブ人に対して、以下のような「不信感」を抱いている

- ガザ地区・ウェストバンクの領土問題で、少しでも譲歩すればなし崩し的に全ての領土を失うのではないだろうか？
- アラブがイスラエルに恐怖心を抱かなくなればイスラエルを攻撃してくるのではないか？（だからこそ、恐怖を与えるような政策を実行せねばならない）
- アラブは、この先ずっとエルサレム壊滅の意志を持ち続けるのではないだろうか？

この気持ちは、ユダヤ人の持つ「和平の達成により、本当の平和がくるのだろうか？」という不安につながる。

正面切って戦えば確実に負けることがわかっているアラブ人勢力はイスラエルに対してテロ行為を繰り返してきたのだが、そのためにユダヤ人はテロに関して非常に敏感になっている。たとえただの忘れ物であろうと爆発物処理班の出動が要請されたり、人命の確保よりもテロ行為を行った犯人を捕らえる方を優先するなど、傍目から見ても相当に神経質である。しかし上にもあげたように、ユダヤ人はアラブ人に対して恐怖を与えなくてはならない、もう少し現実的にいうとアラブ人に弱みを見せてはならない、というユダヤ人の気持ちがあるからこそ、イスラエルに対するテロ行為は徹底的に防ぐ、もしくは報復せねばならないのだろう。

人権問題云々よりも「テロ防止」に力を入れるイスラエルでは、いったんテロ行為が発生すると、普段から敵視されているパレスチナ人はろくな取り調べも受けずに手当たり次第に逮捕されてしまう。それは、「パレスチナ人は全員テロリスト」という短絡的思考を産む。悪循環もいいたところである。ユダヤ人のパレスチナ人に対する理解が深まらないのも当然といえる。

## 15.2 PLO の動向

ここで PLO について少し付け加えておく。

PLO は PLO という一枚岩の組織でなく、政党のように色々な派閥が集まってできている組織だが、その最高意志決定機関はパレスチナ民族評議会（PNC）といい、そこから執行機関である PLO 執行委員会\*<sup>1</sup>のメンバーが選出される。PLO 内の主流派としては、アラファト率いるファタハがあり、もちろん他に非主流派や、反主流派もいる。

さて PLO 内部では、黒い 9 月事件以降に、パレスチナ全土を解放することよりもより現実的に「国連により定められたパレスチナ分割ラインに基づき、ユダヤ人とパレスチナ人の国の両方をつくるべき」との主張が出てきた。この意見は確かに現実的ではあるが、そもそも PLO という組織の最終目標が「パレスチナ全土の解放」であったため、この現実的な「矛盾する」提案と、実現はほぼ不可能に近い理想的な目標との間で PLO はジレンマに陥る。

しかし最終的に PLO は現実的な道を選んだ。'88 年スイスのジュネーブで開かれた会議で、アラファトは

- 国連安保理決議二四二と三三八の受諾
- あらゆる形態におけるテロ行為の放棄
- イスラエルの生存権の承認

という声明を発表する。この宣言は、PLO のあらゆる活動の中でも最もショッキングなものであった。いわばイスラエルの天敵でもある PLO が、敵へのテロ行為の放棄しそしてその存在を認めてしまったのである。

## 15.3 現在に至るまで

PLO の「爆弾発言」から 4 年半経った'93 年 9 月、クリントン大統領の立ち会いのもと、イスラエルのラビン首相と PLO のアラファト議長がワシントンで会見。パレスチナ暫定自治に関する合意（オスロ合意 1）が実現され、この時から暫定自治が始まった。

さらに'94 年 5 月にはガザ地区・エリコ（エルサレムから東に約 20km）自治協定で、同地からイスラエル軍が撤退、'95 年 9 月には拡大自治協定が結ばれ（オスロ合意 2）、ウェストバンクの諸都市まで自治区が拡大された。

'95 年 11 月に和平の推進役だったラビンが暗殺されてしまうが、'96 年に入りアラファト議長のもとパレスチナ自治政府が本格的に始動し、一歩ずつ共存の道を歩み始めている。

'99 年の総選挙の結果イスラエル首相はバラクとなったが、同年 11 月、クリントン・バラク・アラファトがオスロで会談。最終地位交渉に向け、期待が寄せられている。

---

\*<sup>1</sup> アラファトが議長を務めているのは、この執行委員会である

# 索引

- AA 連帯, 22
- OAPEC, 27
- PLO, 23
- PNC, 40
- UNRWA, 21
- アイユーブ朝, 11
- アウシュヴィッツ, 17
- アサド体制, 38
- アジア・アフリカ連帯, 22
- アッバース朝, 11
- アブラハム, 4
- アラファト, 23
- アラブ人, 4
- アラブ石油輸出機構, 27
- アラブ帝国, 11
- アラブの3つのノー, 25
- アラブの反乱, 14
- アラブ連盟, 19
- アラム人, 7
- アルジェ協定, 37
- アレキサンダー, 8
- 安保理決議二四二, 25
- 安保理決議三三八, 28
- イエフェダ, 13
- イスラエル・ヨルダン平和条約, 37
- イスラム教, 6, 10
- イスラム原理主義, 31
- イスラム帝国, 11
- イラン・イラク戦争, 37
- インティファダ, 35
- ウマイヤ朝, 11
- エジプト・イスラエル平和条約, 31
- オイル・ショック, 28
- オスマントルコ, 12
- オスロ合意 1, 40
- オスロ合意 2, 40
- ガザ地区, 20
- カナン人, 7
- キャンプ・デービッド合意, 30
- 旧約聖書, 5
- キリスト教, 5
- 黒い9月事件, 28
- 契約思想, 5
- コーラン, 6
- 国連パレスチナ難民救済事業機関, 21
- ゴラン高原, 25
- サイクス・ピコ条約, 14
- 最後の審判, 5
- サダト, 27
- サダム・フセイン, 37
- 三国協商, 14
- 三国同盟, 14
- シオニズム運動, 13
- 十戒, 5
- シナゴーグ, 5
- 十字軍, 11
- 十字軍運動, 11
- 終末観, 5
- 贖罪日, 27
- 贖罪日戦争, 27
- シリア戦争, 12
- 新約聖書, 5
- スエズ動乱, 22
- 聖墳墓教会, 2
- 石油戦略, 27
- 選民思想, 5
- 千夜一夜物語, 11
- 第一次世界大戦, 13
- 第一次中東戦争, 18, 19
- 第二次世界大戦, 17
- 第二次中東戦争, 22
- 第三次中東戦争, 24
- 第四次中東戦争, 27
- ダビデ, 8
- 断食月, 27
- 断食月戦争, 27
- ディアスポラ, 8
- トランス・ヨルダン首長国, 15
- ドレフュス事件, 13
- 嘆きの壁, 2, 5, 25
- ナセル, 22
- ナチス, 17
- ナバタイ人, 9
- バビロン捕囚, 8
- バルフォア宣言, 15
- パルミラ, 9
- パレスチナ解放機構, 23
- パレスチナ暫定自治, 40
- パレスチナ人, 4

パレスチナ戦争, 19  
パレスチナの地, 3  
パレスチナ民族評議会, 40

ヒットラー, 17

ファタハ, 23  
ファランジスト, 32  
フェズ提案, 33  
フェニキア人, 7

バイルート侵攻, 33  
ベギン, 30  
ペトラ, 9  
ベルシャ人, 8  
ヘルツル, 13  
ヘレニズム文化, 9  
ベングリオン, 18

ホロコースト, 17

マクマホン宣言, 14  
マホメット, 6  
マムルーク朝, 12

6日間戦争, 24  
ムハンマド, 6, 10

メシア, 5  
メッカ, 10  
メディナ, 10

モーゼ, 5  
モスク, 6

ヤーヴェ, 5

ユダヤ教, 4  
ユダヤ民族基金, 14

ヨルダン・ハシミテ王国, 20

ラビ, 5

レバノン戦争, 32

湾岸戦争, 37